



ハタラクヒト * ペディア10

なんとなく 特別編

< 尉川太尊 氏 >

田中永子

はじめに

はじめまして、田中コーチングの田中永子と申します。

私はNLPやコーチング、ソースなどを学び、それらのノウハウや考え方を活かしたコーチングを提供しております。

この度、新しい企画といたしまして、おもに愛知県名古屋市、刈谷市を中心にお仕事をしていらっしゃる経営者の方々や企業や組織の幹部の方々へのインタビュー企画をスタートいたしました。

この企画を始めようと思った趣旨は、将来の先行きが見えづらい現代社会において、第一線でバリバリと働いていらっしゃる現役の経営者の方々、企業幹部の方々が、今何を考えているかということに興味を持ったこと。そして、その考え方に基づいてどんなアクションを起こしていらっしゃるのだろうと思ったことにあります。

また、こうした第一線でご活躍の方々のさまざまな角度からのメッセージを他の多くの実業家の方々と共有したいと思ったことも大きなモチベーションとなっています。

その他、高校生や大学生の方、これから社会に入っていこうとする方にも読みやすいように心配りしておりますので、ぜひご愛読をいただけましたら幸いです。

個人的な考えではありますが、愛知県はモノづくりの聖地であると考えております。このモノづくりの聖地である愛知県にあって、日夜、しのぎを削っていらっしゃる多くの企業人、組織人の生の声をお届けしたいと思っております。

よって、このサイトの大きな特徴として、インタビュー形式のログをそのまま読者のみなさまにお届けするというスタイルを取っています。インタビューさせていただく私と、インタビューを受けてくださる方の真剣勝負。行間の中に潜む間も大切なメッセージだと考えております。

多面体も極まれり・・・よくわかんないです^^； 尉川太尊氏

記念すべき第10回は、年末スペシャルとして、このハタラクヒト☆ペディアの仕掛け人である、尉川太尊（いかわひろと）さんをお招きいたしました。

尉川さんは、起業家支援やセミナービジネスの仕掛け人として、セミナープロデュース業を行っていらっしゃいますが、最近はウェブライターとしてもご活躍です。

また、人生後半の目標として歴史エンタメ小説の作家を目指しているとのこと、さまざまな新人賞にも積極的に応募なさっています。

今日は、ハタラクヒト☆ペディアをどうして思いついたのかという話をはじめ、歴史の話、宗教の話、政治の話など、いろいろな角度からお話を伺ってみました。とにかく、引き出しの数が多いので、また第二回も企画しているところです。

ハタラクヒト☆ペディアファン必読の一冊です。

クロノスプロダクション

現在はおもにセミナー講師へのセミナープロデュース、起業家への起業サポート、ライティングなどを提供。

趣味は読書。

好きな著者は、塩野七生さん、北方謙三さん。

メール：ikawa.hiroto@gmail.com

◆どうしてハタラクヒトペディアを企画しようと思ったのか？

田中永子（以下、田中）：今日はテーマとしてどんな感じで行きますか？

尉川太尊さん（以下敬称略、尉川）：このインタビューの企画を一緒にしている人って誰なんだってというのがいいでしょうね。今まではアノニマスみたいだったわけですから、ちょっとここ触れておきましょうか。私も歴史のこととか話してみたい気はするんですけど（笑）

田中：あははは。ま、こういうのって、出たところ勝負ってありますもんね。

尉川：そうそうそう（笑）今回、特別版ですしね。

田中：そうですね、座談会みたいな感じで。

尉川：じゃあ、どうしてこれをやろうと思ったかとかね。そういったところから深めて行って、出たところ勝負でやって行きますか。そうなったら、宗教の話しなくてもいいですしね（笑）

田中：あははは。

尉川：じゃ、そんな感じで行きましょうかね。

田中：はい。

.....
田中：じゃあ、「どうして、この企画をしようと思ったんですか？」

尉川：導入ないね、いきなりっすね（笑）

田中：いきなりで（笑）

尉川：なんでかって言うと、まずひとつは、あれですよ。田中さんの人当たりの良さ。

田中：ふふふ。

尉川：これ、結構重要ですよ、重要（笑）やっぱり、人嫌いな人に、こういう企画を勧めても、絶対ダメっすよね。

田中：あははは。

尉川：「やだよ。人に会うなんてストレスだよ」という人にね、やれって言っても、無理じゃないですか（笑）もう一つは、ゆくゆくはね、全国規模でインタビューしてもらいたいなって思ってるんですけど、日本の経済を下支えしてるのって、ある意味中小企業ですよ。もちろん大企業もあるけど。でも、中小企業なくなったら、大企業も立ち行かないでしょ。

田中： ですね。

尉川： この間インタビューされたトヨタの部品を作っている会社の方もそうですけど、あそこの会社の技術がなくなったら、トヨタ困りますよね。やっぱり安定的に中小企業があることが大切で、愛知は層が厚いですよね。これ、強さだと思うんです。そういったものを支えていらっしゃるというのが、いわゆる中小企業のオヤジといわれる人たちですから。

中部は太平洋ベルト地帯でいうと、強いんですよね。そういう方たちの、生の声を田中さんが拾ってくる、これっておもしろいんじゃないかって。プレジデントとか、ああいう雑誌からインタビューされると、みなさんよそいきなことをお話しなさるわけです。

田中： ふふふ。

尉川： だけど、このハタラクヒトペディアでは、そこ聞きたいわけじゃないんです。

田中： ですね。なんかおもしろくないじゃないですかあ。

尉川： そう。おもしろくないです。正直おもしろくないんですよ。よそいきですし、すでにどこかで語られちゃってる。そうになると、やっぱ、生の声、本音の部分をとか、その人の裏にある背景とか、そういったもの、聞きたいですよね。

田中： そうなんですよ。ひとつの決定って……。

尉川： うん。

田中： その人のなかに蓄積されたものがあって、それが出てくる一部分なんで。

尉川： うんうんうん。

田中： なんかそれが、わかるとわからんとでは、感じ方が全然違うんですよね。

尉川： そうなんですよ。たまに海外に行きますけど、やっぱ思うのは、やっぱり「日本の国の底力って、あるんだな」って思います。例えば、ぼくらが中学校の頃「ジャパンアズナンバーワン」なんて本が出たりして。

田中： うん。

尉川： 昔、日の丸が世界経済を席卷するなんて言われた時代がありましたよね。その後、プラザ合意があって、日本が、こう揺さぶられていったと思ったら、ドーンとバブルになって、そして経済の規模が大きく膨れ上がって行ったと……。

田中： うん。

尉川： で、その後、バブルが崩壊した後は、91年から93年辺りでしょうかね、それ以降は以前ほどの大きな経済の浮揚も感じないじゃないですか。でも今の若手の社会人の人たちって、その辺りを知らないっていうでしょ。なにがバブルなのか、体感としてわからない。

田中： うん。

尉川： ぼくらは「日本も衰えたなー」って気持ちになったりしているんですが、そこで海外とかに行ってみると、「やっぱり力あるんだな」というところを、かなり感じるんですよ。

田中： そうなんですよ。この間TVで小さな町工場の人たちが取り上げられてて。私が見たのは「錫（すず）」の加工工場で、景気が後退して、国内ではあまり需要がなくなって。でも生き残りをかけて、自社製品を開発して、海外に売り込んでるっていうのだったんです。

柔らかい錫の特性を活かした、「形が変わる器」。一見、なべ敷きっぽいんだけど、手で簡単に形を変えられて、果物入れるバスケットにしたりとか。それが、外国ですごく受けていて、海外の方が売り上げを伸ばしてるらしいんです。まさに技術力っていうもの。

尉川： そうですね。やっぱり底力があるんですね。ぼくは南部鉄器とか好きなんですけど、これも海外シェアが大きいって話も聞きますし。まだまだ日本の底力って残っているんだなって、そんなことを感じたんですよ。

なので、それを支えてる人は誰かというと、やっぱり中小企業のオヤジさんたち、従業員だったりするわけです。このハタラクヒトペディアでインタビューに答えて下さるオヤジさんたちやその会社で働いてくださっている従業員さんだったりするわけです。

田中： うん。

尉川： だからね、極端な話、iPhoneひとつとっても、アメリカの精密機械も、日本の町工場がなかったら立ち行かないわけじゃないですか。目立たないけど、そういう人たちが直接的に間接的に完璧に下支えしている、そういう人たちの生の声聞きたいと。

田中： うん。

尉川： それを、高校生、大学生でもいいんですけど、今の若い人たちが読む。これ、「影響も大きいよね」と思ったんですよ。

田中： 笑

尉川： すべてをゆとり教育のせいにするつもりはないんですけども、ぼくの子供も中学生ですし、いろいろ見てみると、教科書って確実に薄いですね。ぼくが小学校の時に使ってた国語辞典があるんですけど、表紙の裏に2年2組とか名前が書いてあってね（笑）

田中： 笑

尉川： でもそれね、大人の辞書と変わらないんですよ。学校で買わされたやつですよ。

田中： ありましたね。

尉川： ありましたよね。それでね、今の小学校の辞書を見たら、字は大きくて分厚いし、挿絵にドラえもんが。

田中： 爆笑

尉川： そしてね、その分だけ収録出来る情報量が少なくなるんです。だから同じ単語でも、個数が全然違うんですよ。で、用法、用例の数も違うんですよ。つまり、そういうところをぼく肌で感じてるんですね。「これ、だめだ」と。さらに英語教育。

友人ともいろんな話をする中で、日本語が出来ない時に、いわゆる母国語、つまり基本言語の前にね、外国語を勉強することの、愚の骨頂さっていうのも感じます。やっぱ、明らかに落ちてますね、母国語を土台にした基礎学力。

ぼくが行ってた塾に息子も行ってるんですけど、その塾長も「明らかに落ちてる。この10年で顕著に落ちてる。だから非常に危惧している」って言ったんです。なぜ危惧しているかというと、日本には物的資源がないからですねとお互いに認識が一致したわけです。

田中： うん。

尉川： となると、やっぱり、技術やテクノロジーでいくしかない。

田中： うん。

尉川： にも関わらず、理系に進むやつが少ないと。中学の頃、塾に来ていた生徒で、京大に進学したやつが言ったそうですよ。「だめだー」って。「みんな記憶型の勉強しかしてないので、だめだね、先生」って本人は落胆していたと。

田中： うーん。

尉川： あるおもしろいエピソードがあっただけね。ぼくブログにも書いたんですけど、ある少女がいたんです。中学3年で、受験生。

田中： うん。

尉川： その子があるひとつの問題で、つまずいたんです。二次方程式か関数か確率か証明かわからないんですけど。それを塾長に「教えてくれ」と言うんですが、塾長は「いや、ぼくは君に考え方は教えるけども、解き方は教えないよ」って言ったそうです。その塾長は、要はヒントを与えて、その子に考えさせた、本人に。

田中： うん。

尉川： 3日かかったそうなんですよ、3日。そのヒントを使って自分自身の力で、その問題を解ききるのに、3日かかったそうですね。

田中： へえ。

尉川： 最後は解けたんで「解けた。解けたー」っていうことで、塾長のところにやってきたんで、その塾長も「よくやったじゃないかー」って褒めたんですって。

田中： うん。

尉川： で、その女の子、よほど嬉しかったんでしょうね。それを中学校に持って行って、クラスの友だちに「これ、3日かけて解いたんだよ」って報告したそうなんです。

田中： うんうん。

尉川： そしたら、有名な進学塾に通ってる女の子たちが一言、「そんなのうちの進学塾で、30秒で解き方、教えてくれるわよ」って。

田中： あら（笑）

尉川： つまり、「3日も考えさせるその塾って、ダメなんじゃない？」って話だったんですよ。これ、結構端的に今の教育が抱えている問題が出てる事例だなあって思っ

田中： ですね。なんかその後ろにある蓄積されるものが、全然違いますよね。

尉川： ね。

田中： 私、この間NLPのプラクティショナーに行ってきた。

尉川： うん。

田中： その時に聞いた話なんですけどね。「ミルトン・エリクソン」が、『ミスター・ディクショナリー』って別名を持っていたっていう話なんですけど。

※ ミルトン・エリクソンは米国の心理療道家。精神科医、心理学者としても知られており、現代催眠の基礎を築いた人物。

尉川： ほー。

田中： 彼、学習障害か何かで、言葉とかなかなか理解出来なくて、いつも辞書を持ち歩いてたんですって。わからない言葉がある度に、その辞書で調べて。で、言葉を調べる時に、それがどこにあるかわからないから、「F」で始まる単語だったとしても、「A」のところから、一番前

から順番にめくってみていく。

尉川： うーん。

田中： いつもそういう調べ方をしていたんだけど、ある時、はっと気づいて。「辞書って、AからZまで順番に並んでるんだ！」って。

尉川： 凄いですね。自分で気づいた。

田中： だから、彼って催眠で凄く成果を挙げた人だけど、どこに強みがあるかっていうと。もちろんキャリブレーションからのラポールとか総合的なものも凄いと思うけど、その言葉の使い方とか、語彙であったりとかが豊富で、それを自在に扱えたところだと思うんですね。

※ キャリブレーションとは、相手の心理状態を言語以外の方法で知覚するためのテクニック。

※ ラポールとは、セラピストとクライアント間の心理的状态を指すが、特に相互に信頼関係が構築された状態のこと。

尉川： うんうん。

田中： それって、いつも最初の頁から調べていたことの蓄積もあると思うし。「辞書って、Aから順番になってる」っていうことに、その当たり前の法則に、自分で初めて気づいた時のインパクトの大きさってある気がして。

尉川： でしょうね。特に中小企業の人たちは、逆に言うと、自分で気づいていかないと立ち行かないわけですよ。そこに潤沢な人材が入って行かないと、ジリ貧になっちゃうでしょうし。だから、そういう方たちが、自分たちで気づいた方たちが切り盛りしているんだろうと思うし、且つ、そういう方たちのところにいい人材がたくさん入っていくということは、国益に適うことなんですよ。

田中： うん。国益ですね。

尉川： そうそうそう。それがね、ほんとに小さい田舎町だけの話じゃなくて、中部で「名古屋」「刈谷」っていったら、でかいっすからね。そこで、価値が出てくると思うんですよ。それが、やってみたって思った大きな理由のひとつでしょうね。

それにこれ、ぼくの個人的な考えなんですけども、経営者ってある意味『孤独』なんですよ。

．．．．． つづく ^^

◆組織の矛盾は組織の中にある限り見えてこない

田中： ふふふふ。

尉川： だって、愚痴れないでしょ？ 従業員に。

田中： あはは。

尉川： 従業員に人生とか語っちゃったら、「あんた何語ってんだよ」って思われちゃう。ゆっくりと腹を割って話せる相手なんて、同業者とか同級生とかに限られてきますよね。

田中： うん。

尉川： そこにね、田中さんのような人が来て、無邪気にいろいろ聞いてくれると。そうなると思わずいろんな話をしちゃったり、みたいなの。

田中： おもしろいんですね、そういった時に出るお話の方が。

尉川： ね、おもしろいでしょ。そこ、やっぱり意味がある。それも大きいかな。

田中： 尉川さんも孤独なんですか？

尉川： 当時は孤独感もありましたよ、うん。家族とか、会社とか普段のつきあいはありましたけど、どうでしょうねえ。雇われ人だった時は、同僚・先輩とかいて、同じ雇われ人として立ち位置は同じですから。まあ愚痴だって言えるし、横の繋がりは密でしたからね。

田中： うん。

尉川： 会社っていうのは、ヒエラルキーの社会でしょ。トップに立って「問題が発生した」っていった時に、もちろん、下から意見とか上がってくることもあるかもしれないけど、基本、経営者は孤独なもんじゃないかなって思いますけどね。どこかで孤独。もちろん家族、友達はあるんだろうけども、最終的に判断を自分で決定して、その全責任を負わなくちゃいけないわけですから。

田中： うん。

尉川： やっぱり孤独であり、孤独を愛してしまうかもしれないし。

田中： 愛しちゃうんですか??

尉川： 愛しちゃうかもしれないですね（笑） だからこそ、外部の意見、コンサルタントの方とか入って行って、岡目八目でいろいろ見てくれる。

田中： うん。

尉川： 数学のある法則で「ゲーテルの法則」だっけな。自己矛盾はその組織の中に入ってる限り、絶対わからないというものがあるんですって。

田中： あ、そうですね。

尉川： うん。ひとつの閉じられているシステム (S) の中で、その中に入っている限り、絶対に自己矛盾に気づかない。なので、矛盾に気づくためには、一度外に出て外からシステムを観る必要があるってこと。これ、数学的に証明されてるらしいんですけど。

田中： 数学で証明されてるんですか？

尉川： 数学で証明されてるらしいですよ。

田中： へええ。おもしろいー。それ（笑）

尉川： うんうんうん。えっとね、これ『ゲーテルの不完全性定理』だったかな。1930年にクルト・ゲーテルって人が証明したらしいですよ。

田中： え？ それが数式で出たってこと？

尉川： そう！ うん。

田中： なんか、おもしろいね。

尉川： おもしろいですね。ま、ぼくも数学脳は持ってないんで、証明されたという事実を本で読んだだけなんですけども。

これ、第一定理と第二定理があって、第一定理は、『ある矛盾のない理論体系の中に肯定も否定も出来ない公理系が必ず存在する』とある。

第二定理は、『ある理論体系に矛盾がないとしても、その理論体系は自分自身に矛盾がないことを、その理論体系の中で証明できない』とありますんで、今言ったのは、第二ですよ。

これを組織に当てはめると、「ある組織の中に矛盾がないとしても、組織が自分自身に矛盾がないことを、その組織の中では証明できない」となる……ようです。

田中： ふふふふ。

尉川： あはは。

田中： なんか、哲学的なものだと思ってたんですけど。

尉川： うん。

田中： そういうものって。

尉川： ね。

田中： うん。哲学であり、人が行動する時とか、そういう割にあいまいなものだと思ってたので。

尉川： うんうん。

田中： 数学って、きっちり割り切れたりだとか、パシッと1か0かっていうのが出る世界だと思ってたので。

尉川： そうですね。うんうん。

田中： そういったものが、その場面で証明されたっていうのが、とってもお（笑）

尉川： おもしろいっすよね。

田中： おもしろい感じがします。

尉川： うんうんうん。なので、逆にいうと、「数学的にもう証明されたということは、もう議論の余地はない」と。

田中： そうですね。

尉川： なので、「常に正しいんだ」と。「絶対なんだ」と。「永遠不変なんだ」と。

田中： そう！ なんか、すごいですね。

尉川： うん。「これはビリーフだから、それはあなたの思い込みでしょ」という、そんなレベルじゃない。

田中： うんうんうんうん。結構それで片づけられそうじゃないですか。

尉川： そうそうそう。

田中： あはは。こう、ロジックな人にはなかなか説得力のあるものではないけど、数式でそれが証明されてるっていうことは（笑）、ロジックな人も納得せざるを得ない（笑）

尉川： そうそう（笑）「じゃあ、おまえそれ証明しろよ」「無理だよ、数学者じゃないし」って。「それが矛盾してるかどうかは、ゲーテルの不完全性定理を論破してみたら、いいんじゃないの。そしたらあなたが正しいっていうことを、数学的に証明できるんじゃない？」とか言って（笑）

田中： ね、凄いなあ。

尉川： こういうものらしいっすよ。

田中： なんか、ものごとって、思いもかけないところに解答ってあるんですね（笑）

尉川： ね。これは結局、閉じられたひとつですから。だから、「その中に矛盾があるかどうか、なーんてのは、わかんないよお」と。不可能なんだと。

田中： うん。じゃあ、そこから離れないと、その場所から離れないと、見えないってことですよ。

尉川： そう。たぶん単純に言うと、極めてシンプルに言うと、そうっすよ。例えば、その組織の中にいる限り、その組織の問題点などはわからないと。

田中： ですよ。結構、根底に疑問を投げかけるものですよ。

尉川： うん。だから「辞めなさい」って（笑）

田中： あはははは。

尉川： 「辞めたら、よく見えるようになるよ」って（笑）

田中： うんうん。

尉川： わかりやすく言うとね。実際には、そういうわけにはいかないけどね（笑）

田中： それ、結構、生き方とかにも関係してくるじゃないですか。

尉川： 大いに関係あるんじゃないですかねえ。ぼくもね、実は「コンサルタントという職業って、なんの意味があるんだろう」って思ってたんです、昔。

田中： うん。

尉川： 実際、なんちゃっても多いですしね。で、コンサルの存在意義って何かと言うと、これなんだと、ぼくは思ってます。つまり、「ある組織の中にどれだけいいチームが立ち上がっても、いかに客観的評価をしようとする人がいたとしても、その組織の中にいる限りは、問題点、矛盾点はなかなか浮き上がってこない。なぜなら、第二定理で証明されているから」と。

田中： うん。

尉川： でも、「外部だったらいいんだろう」と。で、コンサルタントを入れようかという話になるんですね。結局そういうことなんだろうと思いますね。

田中： 究極、それを、こう、生き方みたいなものに当てはめて考えてみると、「そこから離れた視点を、いかに持つのか」という話になるんですね。

尉川： うん、そうね。そうそう。たぶん、そう。結局、NLP用語でいえば「ディソシエイトしなさい」ってことですよ。ただ、非常に難しいですよ。

※ディソシエイトとは、自分を含めた物事を自分自身の主観から分離して客観的に捉えている状態のこと。

田中： うん。

尉川： だから、究極的に、自分が、自分以外のものになれないっていうことは仕方ないので、完璧に外に出ることは不可能でしょ？

田中： うんうん。

尉川： 結局、「客観視しなさい」っていうのは、主観的になってしまって問題と同一化しているから言うわけですね。問題と同一化していると、その問題の何が問題なのかわからないから。「客観的に一步引きなさい」と、NLPでは教えますよね。

田中： ええ。

尉川： いわゆる「ディソシエイトしましょう。どう見えますかぁ？ うんうん。自分のお、姿をディソシエイトしてえ、映像でえ見てくださあい」

田中： 爆笑　なんで、そんな似非（えせ）っぽい感じな話し方？

尉川： あははは。

田中：　なんかNLPが怪しいものみたいじゃないですかー（笑）

尉川：　じゃ、ここカットで（笑）ま、でも、それはどういうことかと言うと、要は客観的になれば、問題は見えてくるってことじゃないですか。ね？

田中：　うん。

尉川：　これ、使ってるんですよ。これ使ってるってこと、知らないけど、みんなは。NLPのトレーナーさん達も。

田中：　今、「箱から出る」とか、違う言葉で、いろいろ、それ表現されてますもんね。

尉川：　うん。そうですね、そっちのがわかりやすいですよ。だっていきなり、NLP来た人に「ゲートルの第二不完全性定理でしょ」って言ったって、わけわかんないですしね。NLPもこういうものでしょうけど。比較的原点に近いんじゃないかと思うけど、それをどう使うかは、使いこなしの問題で。

田中： うん。

尉川： パソコン上手っていう人が、パソコンを作れるかっていったら、作れるとは限らないですよ。で、こういうゲートルさんみたいな人たちってというのは、パソコン作っちゃうんですね。基盤から。

田中： うん。

尉川： で、ワード使えるかっていうと、そうとも限らないですよ。ワード使うんだったら、ワードの使いこなしが上手な人にお任せしたほうが早いと。そういうことでしょうね。

田中： おもしろいですね。

尉川： うん。

田中： そこに、その人の特性が出る感じが。

尉川： 出ますね。うん、どう表現するかはね。

田中： パソコンであれば、本体の仕組みに興味がある人と、ワードとか、使いこなす方に特性がある人と、いるんですよ。

尉川： いるんですよ。トヨタの工員さんは車を作る仕事ですけども、かといってF1のドライバーのように運転が上手かっていうと、それはわからないじゃないですか。運転と製造は違う。逆にいうと、ハッキングするような人間は、使いこなしがハンパないじゃないですか。

田中： うん。

尉川： そういったところに適性が出てくるんだと思いますけど。日本はそういった面では、ものづくりが得意でしょうし、また、錬金術というか、無から有を作り出すのが、非常に得意ですよ。ひとつのアイデアを元にしてね。火縄銃もそうですし、堺の鉄砲鍛冶とか、あっという間に作っちゃう。零戦とかも、まさかあんなもん作るとは思ってなかったですよ、アメリカもね。

田中： それって、どこの能力が発達してるんですかね？

尉川： どこだろなー。ひとつは「モデリング」があると思うんですけど。

田中： うん。

尉川： まず最初は徹底的にマネしますよね。

田中： あ、確かに。トヨタも一番最初車作る時は、買って、全部分解したって言ってましたね。

尉川： うん。徹底して分解する。それは「守破離」の「守」でしょう。実際使ってみるわけですよ。で、「やっぱ、これって、こうじゃね？」って、どこか問題意識持ってるんでしょうね。空白っていうか。やっぱ、それがああると思うんですよ。

田中： うん。

尉川： っていうのも、ぼくの友人がね、あるゲームのハードメーカーに勤めてるんですけど。

田中： はい。

尉川： 彼が言ってたんですけど、例えば日本人は「これやってくれ」って指示するでしょう。そうすると、やりにくいところ、ありますよね。「こうした方がいいね」って。日本人は、そこをちゃんと改善していくんですけど、自然に。

田中： へえ。

尉川： 結局、「どうせやるんだったら、やりやすくやる」って考え方でね。やっぱり、そう発想が及ぶらしいんですけど。一部中国で生産してて、ラインとか見に行くでしょ？でも、中国では、そういう改善はやらないんですけど。言われたことは、そのままやるけど、「ここを、こうしよう、ああしよう」という発想は持ち合わせていない。なので、そのままですね。

「日本人も中国人も同じようにマネることは出来る。しかし日本人は、一回マネてしまったら、そこになにかプラスアルファをつけて、より便利に、より使いやすくして行こうとする。対して、中国の方ではそれがないので、基本的に同じもの、そのままだ」と、そう言ってましたね。

だから、これって日本独自のものなのかなと思います。これまでの携帯、いわゆるガラケーでも、ガラパゴス化を起こすっていうのも、考えたら凄いことですよ。だって、日本だけでしか起きてない。初期の頃の絵文字文化や imode とか。imode なんか、完全に閉鎖的なシステムですよ。

田中： うん。

尉川： そういったものが、日本人には非常に使いやすかった。日本人がガラパゴス化させたものですから、微に入り細にいり、使いやすいわけですよ。ここにiPhoneやスマホが入ってきたじゃないですか。

田中： うん。

尉川： これって、オープン系でしょ？ ネットで繋がってますから。ガラパゴスでないから、とても使いづらいわけですよ。ぼくも数年前、出はじめの頃買ったんですけど、基本的にはガラケーとiPhoneの2台持ちでしたよ。

田中： うん。

尉川： で、使ってみて、メールする時も手に持ちづらい。今でもそうですよ。今までのような感覚じゃ、メール打てないですよ。MMSを使っても、ショートメールみたいに使おうと思ったら、人によっては有料だったり、無料だったり。これまでのガラケーで普通にやってたことが、当たり前前に無意識的にやってたことが、できないわけですから、スマホには。

田中： そっか。日本人の、特性って。今中国と日本スマホとガラケーみたいな話を伺っていて、あの、日本のものって、横に、こう、触手がのびてく感じ。

尉川： あー、横に。うんうん。

田中： 中国とか、スマホとかって、そこで完結してるっていうか。だけど日本の自然に改善していくっていうのは、それをした方が自分だけじゃなくって、周りも助かったりする、そういうひろがりを感じるんですよね。

尉川： うんうんうん。

田中： こう、余地というか。

尉川： ああ、そうね。

田中： 次を見据えてるっていうか。

尉川： それはあるかもしれませんね。

田中： そこだけっていうと、内側だけ見てる感じがするんですよ。「これだけやってればいいでしょ？」的な。でも「これ、こうした方がいいかも」って、外をみてるような、視点が。

．．．．． つづく ^^

◆日本人のオリジナリティ

尉川： やっぱりそういう視点で眺めると、その大本は、日本がシルクロードの終点ってところとも関係があったかも知れませんね。そして、日本人の先祖はなんだろうって話になる。もちろんいろんなものが混ざってるんですけども。調査も遺伝子レベルの調査もありますし、頭蓋骨、頭の形とか、いろいろあるそうなんですけど、そういうので見ていくと、やっぱり基本的には、オリジナル、独自なものがあったらしいですね。日本列島の中に。

田中： そうなんだ（笑）

尉川： それが、要は南の島から渡ってきたりとか。例えば今までの歴史では、「半島から渡ってきた」というのが主説として信じられてますね。文明東進説とか。

田中： うん。

尉川： ところが、これ遺伝子的には別物だとも言われてます。

田中： へえ。

尉川： もちろん、混ざってますよ、渡来人、帰化人とか。大元の縄文系は、バイカル湖辺りから南進したとか、南方の島々から島伝いで北上したとか、そういうのも混ざっているわけです。で、ぼくらの先祖は朝鮮半島からやってきたと教科書ではそう習うわけですね。でも、実は、そうじゃない可能性も非常に高いんですよ。例えばね、こういう例があったんですね。日本には「前方後円墳」がありますよね。なんか歴史に行っちゃったけど（笑）あ、またあとで戻りますね。

田中： あ、いいです、いいです。行っちゃいましょうよ（笑）

尉川： ありがとうございます（笑）で、「前方後円墳」は日本のどこにあるかって言うと、おもに大和とか奈良とか。アレ、日本独自のものでしょ？

田中： うん。

尉川： ところがね、韓国で見つかったんですよ。

田中： ふふふっ。そうなんだ。

尉川： 見つかったんですよ。だから韓国の歴史学会は「ほら、やったぞ！」と。「俺たちが教えてやったんだ」って思ったんですね。

田中： うん。

尉川： で、日本と韓国の歴史研究チーム合同でね、学術的に調査を始めたんですわ。

田中： うん。

尉川： そうしたところが、埋葬されてるのが「日本人」だったんですよ、これ。

田中： あはははははは。

尉川： さらにい（笑）日本の「前方後円墳」よりも新しいってことが、わかったんです。じゃあ、「日本から朝鮮へってことじゃない？」みたいな。でも、それって感情的に許せないでしょ？ 韓国の国民的心情としては。

田中： うん。

尉川： なので、韓国チームが日本のチームに「発表をちょっと待ってくれ」って頼んだんです。日本チームは「いいよ、待つよ」って、待ってた。その際に、「この前方後円墳はここを治めていた朝鮮人領主の家来が日本人だったので、その日本人にご褒美として、前方後円墳を建ててあげた」という発表をしちゃったんです。

田中： あはははは。だまし討ちじゃないですかー。

尉川： これ、本当の話です（笑） で、古墳をさっさと埋め戻しちゃったんです。

田中： あーらら。

尉川： で、「発表してくれるなよ」と、「日韓友好の為に言ってくれるなよ」と言うわけです。そうは言っても、日本も予算を使って調べてるわけだから、ねえ。

田中： 納得いかないですよ。

尉川： うんうん。韓国はこれで、一安心したんです。「ふう、危ないところだった」と。

田中： 笑

尉川： そしたらね、その後ね、いくつもそんな古墳が出てきちゃった（笑）

田中： 爆笑 收拾つかないっ（笑）

尉川： そう！（笑）で、「これ、どういうことか」というと、基本的に古墳なんてものは、膨大な人間と金と権威がなきゃ、絶対出来ませんよね。

田中： 確かに。

尉川： つまり、王族じゃないと出来ませんでしょ。ということは、結局、「いた」ってことですよ。日本はノルマンディーだったんですよ。

田中： うーん。

尉川： 例えば、イギリスという国は元々フランスの貴族の飛び地だったでしょ。でも結果的には軸足が向こうに行っちゃったんで、元ノルマンディーの貴族たちが「昔、フランスはおれたちの土地だったんだ」という思いは持っていると思うんですけど、ぼく、朝鮮半島もそうだろうと思って。

田中： うん。

尉川： だって、出てきちゃってるから。仕方ないですよ（笑）そして更におもしろいことに、韓半島の一番上に「高句麗（こうくり）」ってあったんですね。凄く大きな国だったんですけどね。で、右半分が「新羅（しらぎ）」、今、中学では「シルラ」って、韓国読みで教えるらしいです。

田中： あー。

尉川： しかしながら、これは「しらぎ」で教えなきゃいけない。日本人は伝統的に「しらぎ」と呼んできたんですし。左半分が「百済（くだら）」ですね。これも中学では「ペクチェ」って教えるらしいです。でも聖徳太子の頃から、我々は「くだら」と呼んできた。一番下に「任那（みまな）」大体こんな感じだったです。

いろいろ遺伝子的なところで見ると、日本のノルマンディーに当たるところが、福岡、北部九州辺りから、中国地方の山陰でしょ。そこの人たちと「任那」ね、左側の「百済」、一番上

の「高句麗」、今の北朝鮮、ここの民族は非常に近いんです。これ「扶余人（ふよじん）」という説もあるんですけども、非常に近い。で、唯一「新羅」だけが、人種的に全く別なんですって。

田中： へええ。

尉川： これを今に置き換えてみますと、「高句麗」が北朝鮮です。韓国は昔の「新羅」の地域が「慶尚北道（けいしょうほくどう）」「慶尚南道（けいしょうなんどう）」、左側の「百済」があったところ、ここ「全羅道（ぜんらどう）」って言います。

そうすると、歴代の韓国の大統領の中で、「全羅道」出身の人って、金大中だったかな。ひとりだけです。あとは、ゼンブ「慶尚道（けいしょうどう）」出身です。

そして「ヒュンダイ」とか「サムソン」とか、ああいう大きな会社あるじゃないですか。あれも発祥は、「慶尚道」です。慶尚道出身でないと中央政府で出世できないし、会社も大きくできないわけです。そして、韓国の中では「全羅道」は、被差別地域なんですよ、今でも。なので「あなたたち、どこ出身？」って聞くんですって、あいさつで、仲良くなった時に。そこで「全羅道」って言ったら、もう、縁切られちゃう。

田中： ええー。ヒエラルキー？

尉川： ヒエラルキーです、完璧に。いわゆる昔の「百済」出身者は下層なんです。今でも百済は、新羅の「慶尚北道」「慶尚南道」から虐げられてるわけです。その「全羅道」は「高句麗」と似てるんですよ。日本とも、似てるという説もあるわけです。

つまり、さっきの古墳の話もそうですけど、日本と百済は仲がいいんですよ。めちゃくちゃ仲よかったですからね。百済の皇太子が日本に留学してるくらいです。フルブライト留学です。「なんで、わざわざ日本にフルブライト留学するんですか」って話でしょ？ ある人は、「それは人質だったんだ」って言う人もいるけど、勉強してたんですから、フルブライト留学して。

てことは、「百済」や「任那」辺りを足掛かりにして、我々の祖先はあの辺りにいたわけですよ。そして「高句麗」辺りまで拡がっていたと思うんですよ。だからこそ、存在して欲しくない日本の古墳が、あるわけじゃないですか、あそこに。

田中： そうだよな。

尉川： だから、ぼくらが学校で学んできたことって、実は、意図的に作られたつくられた歴史

の可能性が、非常に高いと思うわけですよ。

田中： 捏造ですね。

尉川： その可能性がある。もうひとつ、おもしろい話を紹介しましょうか。蘇我氏ね。

田中： うん。

尉川： 蘇我氏で一番最初に名があがるのが、蘇我稲目（そがのいなめ）です。この人は仏教を信仰してました。国家として仏教を導入しようとしたんですね。

対して、従来の神道で行こうとしたのは、物部氏（もののべ）ですよ。物部氏には、物部守屋（もののべのもりや）」っていうのがいたんですよ。蘇我稲目の息子には、蘇我馬子（そがのうまこ）がいましたね。

田中： 有名ですよ。

尉川： 馬子ちゃん有名ですね。で、馬子と守屋は戦って馬子が勝ちます。で、馬子の息子が、蘇我蝦夷（えみし）。さらに、蝦夷の息子が、蘇我入鹿（いるか）ですね。こちら『大化の改新』で暗殺された人です。中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）と中臣鎌足(なかとみのかまたり)に殺されました。大化の改新の発端ですね。

田中： あー。

尉川： 上は、馬子の馬でしょ？ 下は入鹿の鹿でしょ？ これつなげると「馬鹿」になります。

田中： 爆笑 蝦夷はどこに行ったの？

尉川： うん、「蝦夷」って字そのものは、「野蛮人」って意味ですね。

田中： へええ。

尉川： つまり、これ王朝交代があった可能性が非常に高いと、ぼくは思ってるんですよ。これは、ぼくの主観ですよ、あくまでも個人的主観なんで。歴史学者でもなんでもないので。

田中： うん。

尉川： 作家の井沢元彦さんは、「暗殺で殺された高貴な人物については、聖とか徳とか、称える字をつけるんだ」って指摘してるんですよ。だから、例えば、聖徳太子だけど、『聖』と『徳』の良い漢字がふたつも使われていますよね。ですから、「彼は暗殺されてると推測できる」と井沢さんは言ってます。

田中： えー。そうなの？

尉川： うん。

田中： それって、生前からついてる名前ではないってこと？

尉川： 生前からついてる名前じゃないないっすよ。違う違う。

田中： 違うんですか。

尉川： 基本的に諡号（しごう）っていうのは、薨去した後につけるんで。

田中： え、じゃあ、戒名とおんなじってこと？

尉川： そうそうそう。だから今の、平成天皇も、平成天皇と呼ばれるかどうか、まだわかんないです、本当は。もちろん、そう呼ばれるでしょうけどね。ただ、昔は同じ帝が何度も元号を変えてましたから、なんて呼ばれるかはわかんないんです。

で、位の高い、高貴な人であればあるほど、怨霊になる可能性がある。暗殺されたりして、望まずに死んだ場合は怨霊になる可能性があるから、その怨霊を鎮魂させるために、そういう、いい名前をつけてやる。

田中： ええー。そういうわけだったんですか。

尉川： もちろん、ひとつの説ですけども、「あなたは聖なる、徳のある帝でしたよ」で聖徳太子。あるいは「徳を称えたいほどの天皇でしたよ」で、称徳女帝。でも、称徳女帝がどんなことやったかっていうと、弓削道鏡ってお坊さんを好きになっちゃったんですよ。で、要はこの道鏡さんを法皇にしようとするんです。

田中： うん。

尉川： 法皇っていうのは、「ローマ法王」の法王ではなく、「法皇」です。つまり称徳女帝は

、道鏡を皇族の一員に入れようとした。で、朝廷の幹部連中が、「それは困るな」ってことで、「じゃあ、祖霊にちょっとお伺い立てましょう」と提案します。

で、和氣清麻呂（わけのきよまる）という人が、京から大分に行くんですよ、九州北部のね。で、そこに「宇佐神宮（うさじんぐう）」という神社があるんです。その「宇佐」にお伺いに行くんですよ。

田中： その道鏡を皇族に入れてもいいか、どうかを？

尉川： そう。そしたらね、宇佐の神様は「ダメ」って言ったんですよ。亀甲占いかなんかしたんでしょうね。とにかくダメだということになって、和氣清麻呂が京に戻ってきました。そして、称徳女帝に、「どうも祖霊の方ではダメらしいです」って報告したんですね。

田中： うん。

尉川： で、祖霊がダメだったんなら仕方ないってことで、道鏡の皇室入りは阻止できたんですけど、「称徳女帝」はよほど腹が立ったんでしょうね。和氣清麻呂に対して、「おまえ、今日から名前変えろ」と命令したんです。清麻呂が、「なんて変えたらよいでしょうか？」と訊ねると、称徳女帝は、「おまえは和氣清麻呂じゃなくて、別部穰麻呂（わけべのきたなまる）とせよ」って名前を変えちゃった。

田中： え、えー??

尉川： そんな話があったわけですよ。称徳女帝はそういう一面を持つ人なんですけど、「称徳」なんですよ。例えば、日本史学的に最初の怨霊は誰かということ「崇徳上皇（すとくじょうこう）」ですよ。この人、保元の乱で負けたあと、後白河院に「申し訳ございませんでした」って謝った。で、お経を書いて、後白河法皇に贈ったんですけども、受け取り拒否されたんですよ。今でいう着信拒否ですよ。

田中： あー、それって「平清盛」の時に。

尉川： あった、あった。あったでしょ。

田中： 「ピンポン」のアラタ君が、めちゃくちゃ怨霊になっちゃって。あれ、凄く叩かれましたけどね、あの表現は（笑）

尉川： はははは。あの人は「徳を崇える上皇」でしょ。怨霊になったからって怨霊上皇とか書

かないです。

田中： そうかあ。

尉川： そういうようにしていくと、どうも日本はそういう称えるのがあるんだけど、それは大化の改新からなんですよ。大化の改新までは、蘇我馬子や入鹿で馬鹿とか、蝦夷とか。蘇我のお墓に行くと、もうボロボロでしょ。石と石室があるだけ。ということでね、これはね、やっぱりね、ぼくは、おっきなレボリューションがあったんじゃないかと（笑）

田中： あははは。なんで時々そんな怪しい人になるんですか（笑）

尉川： あははは。あんまり革命っていうと、活字になる時に、やらしいかなって思って（笑）

田中： あはは。もうキャラまでそんな似非にならなくていいし。

尉川： そっすね、そっすね（笑） いやいや、ほんとそうじゃないかなって思いますね。だから、逆に言うと大化の改新の後、天智天皇が政権を取ったでしょ。わかりやすく言えば、天智、中臣が俺たちの時代が来たって言ったわけですよ。

天智もすぐには天皇にならなかったですけど。その後、天智が帝になった後、今で言う跡目争いがあったんです。その主役が、大海人皇子（おおあまのおうじ）です。こちらは、日本史学的には、天智の弟って位置づけです。

そして、天智天皇の実の息子は、大友皇子（おおとものおうじ）です。で、天智天皇、なんか心配になるんですよ。なんでかっていうと、天智天皇の弟が大海人皇子でしょ。ひょっとしたら、自分の息子の大友はまだ幼いから「ヤバいんじゃないか。俺の死後、大海人が俺の跡目を狙っとるんじゃないか」と。

そう思って、天智が大海人皇子を呼びつけたんです。「おまえ、ひょっとして、いらんこと考えとりゃせんだろな？」って。大海人は、「いやあ、なんも考えとらせんですよ、そんなの」って、その場を切り抜けます。そして、すぐに大海人は天智の前から姿を消して逃げてくんですよ。

田中： うん。

尉川： どこ逃げたかっていうと、紀州の山ん中、紀伊半島のね。山奥深く逃げて行ったんですよ。そこで、戦争が始まるんです、「壬申の乱（じんしんのらん）」ですね。そこで大海人皇子は勝つんですね。諡号は、「天武天皇（てんむてんのう）」です。

で、天武からダーって天武系の帝が続いて行くんですね、持統天皇（じとう）まで。ここでおもしろいことがあるんです。京都に泉湧寺（せんにゅうじ）ってお寺があるんですけど、そこには歴代の帝のお位牌が祀られているんですよ。なぜなら、江戸時代までは、神仏混合だったからね。一応、昭和天皇まであるらしいんですけど、位牌がないものがあるんですって。

田中： うん。

尉川： その、ない天皇は誰かというと、天武帝から持統帝まで。彼らの位牌がないんです。つまりどういうことかということ、日本の正当な帝として祀られてない可能性があるんです。もちろん、いろいろ表側の歴史解釈では理由をつけてますよ。でも、ないものはない（笑）

田中： なに？ そのミステリー（笑）

尉川： つまり、王朝ってかなり変わってるんじゃないかって話なんです。表の歴史とは別に。

田中： 都合のいいように。

尉川： うん。都合のいいように変わってる……可能性がある。だから結局、その直後の藤原摂関系の政治なんて、ひどいもんでしょ。こう言っちゃなんだけど、日本が日清戦争に勝って、朝鮮半島の李氏朝鮮（りしちょうせん）を独立させましたよね。いわゆる朝鮮半島の後ろ盾になったでしょ？ それまでの間、李氏朝鮮には、「両班（りゃんぱん）」って貴族階級がいたんです。

田中： ふうん。

尉川： で、日本が朝鮮半島に入って行ったわけですが、その貴族階級が、もうひどかったんですよ。両班は自分たちの生活しか考えてない。だから民は疲弊しまくっていた。民の建物はボロボロ、ほんと掘立小屋みたいなところに住んでたんですよ。それ見た時にね、これ藤原氏と一緒にやんかって思ったんですよ。

藤原氏の頃って、どうだったかっていうと、藤原道長とか、今にも残る非常に立派な仏像建築もあるけど、当時の民百姓は非常に貧しい暮らしをしてましたね。でも、彼らは放置ですよ。政治は放置して歌舞音曲に明け暮れてたわけです。そして、地方では治安が乱れて、血を血で洗うような社会になっていきましたね。

田中： うん。

尉川： それから、日本の土地は、本来は公地公民で帝のものだったわけですよ。ところが藤原摂関家が政治をするようになって、まずは『三世一身の法』を制定しました。「あなたが開墾したら、三代はあなたのものにしていいよ」って法ですね。これが723年ですね。

その20年後、『墾田永年私財法』を制定しました。これは「自分が開拓した土地は、ずっとあなたのものですよ」って法律です。こういう公地公民を根底から覆すような法を、朝廷で力を伸ばしてきた藤原氏が自分たちで作ったわけです。これ、ほんとおかしいでしょ？ おかしんです。

田中： うん。全然違う。

尉川： 全然違うでしょ？ そして、思いっきり、獲った獲られたのハードボイルドな、北斗の拳の世界になってしまったんですよ。

田中： ふふふ。

尉川： 修羅の世界ですよ。で、ジャイアンがいっぱいいるわけですよ、その辺に。「おれのもはおれのもの、おまえのものはおれのもの」でしょ。

田中： うん。

尉川： だから、自分の命や財産、土地は自分で守らないといけないじゃないですか。法律的には自救行為っていうんですけどね。本来、法律が発生するような文化にまで成熟すると、こういう自救行為は抑制されるんです。個人で仇討ちしたり、自分で贓物（盗まれたもの）を取り返すなど。おまえの代りに国がそれをやるってことで、治安を維持するわけですね。

でも、藤原摂関政治では、その国がもう藤原家の私物と化していて民をまるで顧みない。奪われたものは自分で取り返さないといけない。身内が殺されたら自分で仇を討たないといけない。できれば、獲られたくないし、殺されたくない。それで、出てきたのが「武士」ですよ。自衛するためにね。

まあ、そういった武士連中が最後は藤原政治をひっくり返して、平清盛から源氏へと至ります。で、武家政権を建てたわけですね。それで、少しまともになってきて、室町時代。さらに、何百年経って江戸幕府で、非常にいい時代になったという。

田中： うん。

尉川： そうやって考えると、ね、やっぱ、日本人の歴史というのは、獲った獲られただけじゃないかなって思うわけですよ。だから、蘇我入鹿、馬子、蝦夷のちょっと前が古墳時代ですから、まだ日本がつまびらかになってない時期ってというのは、実は日本から朝鮮半島に行って、そこの連中と融和しながら、広げていったんじゃないかと。

田中： うん。

尉川： 新羅のそこには支那から渡って来てるんですね、遺伝子的に。あそこ飛び地なんです。なので、要はお互い、ガンガンやりあって。その頃は、唐が強かった。日本・百済連合軍は、唐・新羅連合軍に負けてしまったと。で、追い払われて日本は完全に朝鮮半島から先に進むことが出来なくなったと。それで百済も滅亡した。

田中： ふうん。

尉川： 百済から、たくさんの日本人が帰って来てますね。その人たちが『帰化人系』といわれる人たちですね。そういうようなことだったんじゃないだろうか、と思うんですね。それに、1万2千年前から7千年前あたりまで、朝鮮半島からは人の気配がまったくなくなるんです。遺跡が出ないんです。こういうところからも、教科書で習うことってなんか矛盾してくるんです。なので、逆に言うとそういう面では、日本の歴史は非常におもしろいんです。探り甲斐があるし、想像の余地がたくさんある。

例えば、『白村江（はくすきのえ）』の戦い』に何千隻もの船で攻め込んでるんですよ。戦力でいいますと、日本から42000人くらいの兵隊を送り込んでます。百済救援のためにね。百済は5000人の戦力です。

田中： うん。

尉川： その頃の唐ですけど、唐の船が200隻前後。対する日本の船、800隻ぐらい。

田中： へえ。かなりの。

尉川： でしょ。なのに、遣唐使も後半辺りになると、渡航成功確率はどんどん下がるんですよ。4隻とか出したうち、1隻つけばいい、とかそういうレベルになってるわけですよ。

田中： それって、なんで？

尉川： 私の想像なんですけど、造船技術の劣化かもとか。

田中： 造船技術の問題なんですか？

尉川： そう。昔の技術は、その民族が持ってたんですよ。例えば、ヒッタイトは鉄器を開発したといわれてるんですが、鉄器を開発したからこそ、めちゃくちゃ強くなったんですね。基本、技術は民族で伝承されていきますからね。日本人の造船技術が下がっているんだらうと。てことは、おそらく、ここでも王朝交代があったんじゃないかと想像するわけです。

田中： へえ。

尉川： そんなで、天武天皇が紀伊半島に行ったという話をしたと思いますけど、その紀伊半島にいた連中の一部が、今度は伊豆半島に移住してるんです。で、大和朝廷から「船を造れ」と言われたんですよ。その時に造った船が、「枯野」というやたら速い高速船なんですよ。同時代の他の地域の日本人が造れなかった高速船を、伊豆半島の人々が造ってるわけです。

天武は『大海人皇子』でしたね。大海の人の皇子ですよ。海と深く関係がある名前ですよ。その大海人皇子は、壬申の乱の時には紀州に下がって兵を集めたわけです。つまり、当時の紀州は海に深い縁があり、造船技術に長けた部族が移住していた場所である可能性もあるわけです。そうした部族のリーダーが大海人皇子だったんじゃないかってことなんすね。

その昔、ノルマンディである九州北部にいた海洋部族がいた。それが、だんだんと東に移住していった。一部は四国へ、一部は中国地方へ、そして紀伊半島へと流れていった。そうして、紀伊半島に定住した部族の中から大海人皇子が出てきた。だからこそ、この部族は大海人皇子と共に蜂起した。そして、大海人皇子は大友皇子に勝ち、朝廷の実権を握った。彼からすれば、新しい天武朝という朝廷を開いたようなものだった。しかし、天智朝の巻き返しがなされ、天武朝は持統帝で途絶えてしまった。それは、泉湧寺に天武から持統の位牌がないことから推測される……みたいな？ ちなみに、この海洋部族の痕跡は、奥州白河あたりまで残ってるようですけど。

そういったところから見ると、日本には、実はいろんな人たちが流れ込んで来ているんだらうと。で、政権の取った取られたを繰り返しながら、ここまでやってきていると。

田中： うん。

..... つづく ^^

◆切羽詰ると自然発生する「ますらお」たち

尉川： で、行くところまで行って、どうしようもなくなるわけですね。そういった時、日本の歴史には、必ず何か出てきます。武家のような『ますらお』がポンと出てきますね。鎌倉末期もそうですね。政治が乱れてくると「こりゃ、あかんわ」となって、民の中から鬼子たちが出てくる。

例えば、悪党（あくとう）とかもそう。悪党で有名なのが、楠木正成（くすのきまさしげ）なんですけど、彼は武士ではなくて、本来は商売人なんです。輸送とかを仕事にしてたんです。佐川急便とか想像するとわかりやすいんですけどね。

昔ですから、追剥（おいはぎ）が出たりするわけですよ。治安が乱れて、追い剥ぎや野盗が出て、安全に荷物を運べないわけです。ロジスティクスのセキュリティが維持できない時代だったんですね。で、どうしようもないってことで、佐川急便さんが武装するんですよ。これが、悪党の起こりです。

田中： うん。

尉川： 最後は、足利尊氏（あしかがたかうじ）という源氏の棟梁にかすめ取られるんですけど。それがまたうまくいかなくなって、次が出てきて、と。

田中： けっこう短いサイクルでころころ代わってるんですね。

尉川： 代わってますね。そこで初めて出てきたのが、織田信長公だったりするんですよ。あなたの地元で。

田中： 笑

尉川： 天才が出てくるわけですよ、天才。で、信長公は、ご存知『楽市楽座』をやるんです。「わしんとこだったら、税金いらなからね。関所も取っ払っちゃうからね。もうタックスヘブン作っちゃうからよろしくね」みたいな。

すると、みんなそこで商売したいじゃないですか。で、人が集まってくる、人が集まってくるとお金も入ってくる。金が入ってきて、彼は何をしたかっていうと、新しいシステムを考えたんですね。

田中： うん。

尉川： それまでは、兵隊は農民だったんです。だから農閑期の時しか戦が出来ないんです。

田中： そっか。稲刈りの時はやれんってことですね。

尉川： やれない。春になったら田植え、秋には刈入れをしないといけない。だから武田信玄にしても上杉謙信にしても、兵隊は兵農分離されていないんで、春までに帰らなきゃいけないんです。

田中： 笑

尉川： 大変ですよ。ところが信長はありあまる財力を使って、兵農分離したんです。つまりプロフェッショナルな兵を雇うという形にしたんですよ。だから、農民が兵隊にならなくていいじゃないですか。農村だって人がいた方がいいけど、昔は子たくさんだったでしょ？

田中： うん。

尉川： 「そのうち3人ぐらいよこせ、金やるから」って、兵隊として雇っていくわけですよ。で、常備軍が出来るんですよ。

田中： じゃあ、備えは万全ですね。

尉川： もう冬とか怖くないじゃんみたいな。これ、共和制ローマでも同じことやってます。マリウスの軍制改革ということで、千何百年前かにやってるんです。みなさん勘違いされてるんですけど、初期のローマは農業国なんですよ。

田中： うん。

尉川： 今、西洋人はみんな肉食うってイメージがあるでしょう？ でも、もともとのラテン人は、そんなに肉を食わないです。彼らの主食は小麦です、粉もの食べてたんですね。なので、当時肉ばかり食ってたガリヤ人やゲルマン人は、金髪碧眼で身体でかくて、野蛮。こういう連中と戦わなくちゃいけない。で、結局それでも遠くに遠征すれば帰って来れないでしょ？

田中： うん。

尉川： 困るし、国内荒れるんですよ。畑耕す人もいないから。苦勞して戻ってきたら、畑を他の誰かに盗られてたつてこともよくあったらしくて。そこで軍制改革しようってことで。

田中： そのシステムに気づくってというのが、天才なんですね。

尉川： 天才なんですよー！（笑）

田中： あはは。

尉川： 天才ですよ。マリウスも信長も！ 超天才。

田中： だって、そういうのに目を向けたことが、今までなかったわけでもんね。

尉川： うんうん。人が気づかないところに、気づいちゃう。

田中： まさに、こう、「無から有をつくる」っていう。

尉川： そう！ 無から有をつくるんですよ、彼らは。信長が日本に存在してくれたことが、もの凄く影響強いんですよ。信長を嫌いな人、多いですよ。比叡山延暦寺を焼き討ちしたとかいうけどね。

田中： うん。

尉川： でもぼくはね、もし日本に信長がいなかったら今の日本は、日本国になってないと思いますよ。例えば、中東だと宗教戦争激しいじゃないですか。

田中： うん。

尉川： 宗教って、人殺しや戦争の大きな原因になりますからね。

田中： そうですよ。

尉川： 日本って比較的、今ないでしょ？ それはなぜか？ 信長がいたからですよ。

田中： 確かに、今まで疑いも持たずに、盲目的に信じてたものに、弓引いた感じでもんね。

尉川： そうなんですよ。そうなんですよ。当時、比叡山、もの凄い力持ってましたね。更には本願寺もあるでしょ。もう一向宗とか加賀の国では『自治』してましたから。石山本願寺とか、こういったところと、戦ってるんですよ、信長は。で、連勝しているんですが、何度も赦して

るんですよ。何度も赦してるんだけど、連中は、また信長がちょっと後ろみせた瞬間に反旗を翻す（笑）

田中： どっちが仏に仕えてる（笑）

尉川： あっはははは。そうそうそう。そうなんですよ。で、信長、弟まで殺されちゃって。だけど石山本願寺で、結局勝って、その跡地に大坂城が建つんですけどね。

田中： うん。

尉川： その時に信長はなんて言ったかっていうと。自分の弟、身内も部下もたくさん殺されてますから。これはもう、後顧の憂いを断つために、普通だったら皆殺しにしようと考えます。

田中： うん。

尉川： ところが信長は、皆殺しはしなかったですね。命を助けて、本願寺に求めた条件はひとつだけ。それはなにか??

田中： うん?

尉川： 武装解除だけなんです。「信仰の自由は担保してやる、ちゃんと武装解除すれば、お前たちはそのまま浄土信徒として、仏を拜んでもいいよ」と言ったわけですね。ここで日本は、はじめて宗教と武力が分離されたんですよ。それまでは、僧兵なんかで武装した武装宗教集団でしたからね。

田中： なんか、ローマ人に似てますね。

尉川： 似てるんですよー！ よくわかりましたねー。ぼくも思ったんですよ。

田中： ね、その寛容さとか。

尉川： そう、ラテン語で、寛容をクレメンティアと言います。非常に、似てるんですよ。で、これは、ぼくが「こうであったら、いいな」という想像ですけども、日本人とローマ人って非常に似てるんですね。だって入浴もそうですよね。「テルマエロマエ」もそうですけど。

田中： 笑

尉川： うん。最盛期の北限がイギリスの真ん中くらいかな。そこに「ハドリアヌスの長城」ってあるんですけど、あの辺りまでローマでしょ。南は今のマグレブだから、チュジニアとかリビアとか、あの辺り。今中東で一番激しいシリアとかあるダマスカスとか、あれローマですから。平和だったんです。もう歩いて行けるくらい。ローマが治めてるから、平和なんです。

田中： うん。

尉川： その広い地域に当然ローマ人が入植して行きましたんで、公衆浴場がたくさんあったんですよ。「ローマの道はすべてに通ず」って言いますから、街道も整備されてる。日本の街道と違って、ちゃんとした舗装道路です。道幅も広くて馬車が行き交うくらいの道路です。歩道だってありますし、宿場町もありました。

田中： うん。

尉川： ローマ文化がその街道を伝って全ローマに広がるわけですね。にもかかわらず、フランス、いわゆる当時のガリアですね、スペインも、イギリス南部も、こういったところにも入浴の施設はいっぱいあったけど、入らなくなったんですよ。

田中： あー、あれじゃないですか？ お風呂って、武器持って入れないじゃないですか。

尉川： うんうんうん。

田中： こう裸のつきあいていうか、許せる部分っていうか、その相手に心許してる部分がないと、出来ないんじゃないんですかね？

尉川： そう、それもあるでしょうね。大きな原因のひとつでしょうね。で、もうひとつは、キリスト教が普及したっていうのが、あるんですって。

田中： へ？ 宗教的な？

尉川： そう。人前で裸をさらすのは、よくないことだというキリスト教の教えが、広まったおかげで、ローマ人も入らなくなりました。

田中： あ、そう??

尉川： うんうん。

田中： うん。

尉川： それに造船技術は古代の方が高いでしょ？ そういったところからみると、ひょっとしたら「向こうの方から流れてきた人たちがいるんじゃないか」なーんて思うこともあるわけよね。ま、この辺はロマンですけどね。もちろん、湯につかるという習慣が確立されたのは江戸時代なんで、一概には言えないですけど。

ともあれ、日本人は、手先も器用、さらによく改善する、そして、基本的に寛容でしょ？ あんまり恨むってこと、基本ないじゃないですか。

田中： ないね。

尉川： 例えば、韓国の大統領は、「我々は千年恨む」って公言してますよね。

田中： ははは。

尉川： そんな発想ないっすよ、日本人には。自分がどんだけひどいことされたとしてもですよ、相手がほんとに「悪かった。すみませんでした！」って謝って来たら、水に流すでしょ？ どこか敵をも赦す気持ちがあるじゃないですか。

田中： うん。

尉川： そういうクレメンティア。寛容性。ローマもそうで、どれだけ敵対してたとしても、敗戦国に対して、非常に柔らかく接するんですよ。

田中： えっと、信長の功績っていうのを考えた時に。信長って凄いですね。

尉川： うん、凄いんですよ。

田中： 今まで、「見ちゃいけない」とか、その禁忌に立ち向かっていった人って感じがしますね。

尉川： うん。ほんと、ほんと。あの人は、ほんと天才ですよ。名古屋が産んだ偉人です。あの人がいたことで、日本の今があるんだということでしょう。もしあの人がいなかったら、まだ宗教対立なんてことをやってたかもしんないしね。で、何より凄いのが、グランドプランを掲げたところですよ。

田中： うん。

尉川： 秀吉、家康は、基本的に信長のグランドプランを踏襲しただけなんですよ。

田中： あー。

尉川： 例えば、「天下、麻の如く乱れた時、各戦国大名が京都を目指して号令をかけることを夢みていた」なんて言葉がよく使われますよね。あの言葉は前提が入ってまして。「各戦国大名はすべて、天下統一を目指していた」という前提があるんですね。

田中： ですね。

尉川： 絶対、そう思っていましたよね。ところが天下統一を、ほんとの意味で考えていたのは、信長ひとりだけなんです。武田信玄は、京に行くには行くけど、すぐ戻ってくる腹積もりだし、今川義元もそう。つまり室町幕府の延長線上で、自分のアウトカムを捉えてたんですよ。

田中： うんうん。

尉川： 且つ、「宗教勢力との対立、これをどうするか？」なんてこと考えてない。「謙信」は「景虎」から名前を変えた。これ、お坊さんの名前ですよ。「武田信玄」もお坊さんの名前にしてる。宗教勢力の範疇、今ある既存のシステムのなかで、自分の立ち位置をどう捉えていくかという考えしかなかったんです。

田中： あー。

尉川： ところが、信長はどうか？「足利義昭」だっけ、最後の将軍に気に入られたわけですよ。その時信長は、義昭から「室町幕府の副将軍にしてやるよ」って言われたんですよ。これが謙信や信玄であれば、「あざーす」って喜んじゃいますよね。「これで、俺、盤石」って。つまり、日本政府の中で、言ってみれば、副総理、あるいは官房長官を命ぜられたようなもんですよ。

田中： うん。

尉川： たぶん、喜んじゃいますよ。で、「日本政府の中で何をしていこうか？」とか考えるでしょう。信長は違います。「そんなの、要らないっす」と言ったんです。つまり、出自としては、それまで地方公務員の平の課長の息子みたいなやつですよ。いってみれば、刈谷市の財政課の課長の息子みたいな感じですよ。その人が突然、「日本政府の官房長官にしてやる」って言われたんですよ。

田中： うん。

尉川： でも信長は「そんなの、要らない」って、断って帰って来てるんです。

田中： えー。なんか、箱の外、出てる感じします。

尉川： もー完璧に箱の外に出てますよね！そこからの視点がないですね。「室町幕府の中でどうしようか」なんて、発想はないです。これは、ぼくらが歴史を現在から見てるから、信長の行動が正しいってわかるけど、その時だったらば、「馬鹿じゃないの？」って言われてたはずなんですよ。

田中： 確かに。

尉川： そんなくらい、凄い人ですね、発想が。このグランドプランこそが、「日本を統一する」というものなんです。で、統一政府をつくった後に、たぶん「帝をないがしろにするのはヤバいだろう」と思ってるんです。帝をないがしろにして殺された人、たくさんいますから。

田中： うん。

尉川： だから、天皇制は残しておく。けどお、朝鮮半島。それから「高句麗」の辺り。「元々は、俺たちのものだった」ってくらいの認識は、当時はまだ残っていたかもしれない。そういうところを足掛かりにして、支那や天竺。その当時だと明国かな。明国まで日本にしちゃうと、相対的に日本の帝の地位は下がるでしょ。そういうこと、考えてたんじゃないかって説もあります。

田中： うーん。

尉川： スケールが違いますね。で、そのグランドプランを踏襲しつつ、秀吉は朝鮮出兵で失敗したんで、結局、徳川家康が天下を獲った。日本を掌中におさめたってことでしょうね。なので、日本人は、そういうふうに見ると、なんかそういう伝統とかあるんでしょうね。ひとつ、大きく切り替えるような。そういったものが脈々と、日本人に連なって、誰教わるものではなく、勤勉であろうとするんじゃないですかね。そして、寛容だったりする。

田中： うん。

尉川： そういったところが、ぼく、日本人の懐の大きいところなんじゃないかなって気がしま

すね。そうそう、ボクがやってるフランスまとめブログもお見せしたんですけど。

田中： はい。

尉川： 「日本人って、不思議だよね。あんだけ自分たちの深い文化とかあって、なんでフランス人のマネをするんだろうね？」ってコメントがありました。やっぱり、そう見えるんじゃないかと思います。

田中： うん。どうなんだろ。ある意味、貪欲なんですかね。

尉川： うん。そうですね。貪欲、かもしれませんね。なんか、「前へ、前へ」というか。あるいは、もっと学びたいという気持ち。で、基本的には、楽天的ですね。

田中： じゃないと、赦せないですよ。

尉川： うん、そうそう。で、江戸時代に日本に来た外国人もたくさんいます。その人たちが、いろんな手記を書いていますね。それをまとめた「逝きし世の面影」という本がありますね。

田中： あー、私も。

尉川： 読まれました？

田中： はい。

尉川： 日本を訪れた外国人が一様に言ってるのは、「日本人はいつもにこにこしてる」ということや、「性に対して非常に罪の意識がない」ということです。なぜかというと、きっとキリスト教を排除できたからですね。ですから、15～6歳の若い女の子が素っ裸で行水してるとか、たまたま通りがかった人たち同士でエロ話に華が咲くとか。

田中： 今度インタビューお願いしようと思ってるカメラマンさんが、その本勧めてくれたんです。

尉川： あー、そうですか！ あの本は凄くおもしろいですね。うん。日本人って、元々そういうところがあるじゃないですか。楽天的だし、寛容だし、水に流すし、礼儀はあるし。もちろんね、ネガティブな面もありますよ。それはそれであるんだけど、総合的にみると、貸借対照表でみてくと、やっぱり恵まれてるんじゃないかと思いますね、いろんな面で。民族的な性格というか。そういうものの延長線上に。今があるんだと思いますね。

田中： なんかね、日本って、八百万の国（やおよろずのくに）、神がいるっていいですけど、こう、幅が広くて。それって、いち宗教だけを信じるってことに比べると、とても幅が広くて、世の中で、いいこともあれば、悪いこともありっていう。善悪があることとか、そういったものを、ひっくるめたものを「この世だ」みたいな。

尉川： うん。

田中： それにつながるような感じがしてて。それは、私はひとつの真理だと思っていて、それを根本的にというか、DNAの中に組み込まれてるような気がする。

尉川： なるほどね。うん。

田中： シンプルで、すべてをのみこんだ上で、なかには「いろいろなものがあって、エッセンス的にX=Yになったよね」みたいな。

尉川： うんうん。

田中： こう、深さがあるっていうのかな。

尉川： ありますね。

田中： シンプルな言葉の裏に、いっぱい意味があるようなもので。それが言葉だけじゃない、理解、納得感っていうの？ 腑に落ちてる感が、あるような気がする。

尉川： なるほど、なるほど。やっぱり、その発想が日本的でもあり、ローマ的ですね。ローマも帝政に入ってしばらくは良かったんですけどね。ローマも昔、多神教だったんです。だからこそ、他者に対して、寛容だったんだろうと思います。

田中： そうそうそうそう。ひとつしか症例がないと当てはまるものって、少ないけど、たくさん症例があると「これもあるよね、そういった場合もあるよね」みたいな。

尉川： そうそうそう。

田中： なんか、そんな感じします。

尉川： やっぱりそうだと思いますよね。「ヘブライズム」と「ヘレニズム」って言い方をよく

するんですけどね。で、「ヘレニズム」っていうのが、いわゆるギリシャ、ローマにあったような多神教的な発想ですよ。

田中： うん。

尉川： 西洋の文化を考える時は、必ず『ヘブライズム』と『ヘレニズム』という視点で眺めていかなくちゃ理解できないんです。で、ヘブライズムは何かっていうと、ヘブライ語という言葉でわかるように、ユダヤ教とかキリスト教、あるいはイスラム教とかです。これは一神教ですから、『善悪』ですよ。このヘブライズムに影響与えたのが、拝火教（はいかきょう）と言われてるものですね。

田中： 拝火教？

尉川： ええ。ゾロアスター教とも言われてます。ペルシャで生まれたんですね。善悪二元論で、「良いか悪いか、白か黒か」っていう宗教です。このゾロアスター教っていうのが、ヘブライズムに大きな影響与えたって言われてます。

田中： はい。

尉川： ユダヤ教は、単なる地方宗教だったんですよ。ところが、一神教って強いですからね。だんだん大きくなっていき、またキリスト教ができました。

田中： ええ。

尉川： ローマは多神教、クレメンティアで、人を受け入れていきますね。だからキリスト教の布教も最初の頃は許してたんですよ。ローマの為政者たちも、最初はユダヤ教やキリスト教にはとても寛容でした。ところが、寛容で接している間に、最終的には、乗っ取られてしまった。

もちろん、ローマ側の統治上の思惑というものもあったのですが、ローマがキリスト教を国教としてからは、すべてを『善悪二元論』でぶった切るようになってしまったんですね。で、そんな強力無比なキリスト教が、どうして日本に根付かなかったのかっていうと、鎖国してたからですよ（笑）

田中： あー。

尉川： 鎖国してたでしょ？ 危なかったです。あれ、鎖国してなかったら、日本もヘブライズムにやられちゃった可能性もあります。

田中：　なんか、とてもいいふうに作用してるんですね（笑）

尉川：　そうなんですよ。踏絵をやってね、殺された絵なんかを、ぼくら教科書で見せられてね。その時は、「ひどーい」とか思ってたんですけど、あれ、やってなかったら日本はこんなに寛容な国じゃなかったかしんない。

田中：　「起こるべきことは起こるべくして起こる」っていいですけど、いい作用してるんですね。

尉川：　してると思いますよ。戦国時代の日本はほんとヤバくってね。スペイン、ポルトガルという、当時、世界の二大強国ですけども、これが宣教師をどんどん世界各地に出してますね。そして、自国の植民地にして行くんですけど、当然「日本も植民地にしよう」という意図がありました。そうした古文書がいっぱい残ってます。

日本に来たイエズス会宣教師たちが「どうしたら日本を植民地に出来るか？」っていういろいろ書簡でやりとりしていますし、デマルカシオンという線を世界地図に引いて、どこからがスペイン領、どこからがポルトガル領って勝手に決めたりしていました。

田中：　外科医がレントゲンで悪いところを見るのに、健康な状態のレントゲン像がわからないと、病変があっても理解できない、みたいなところってあると思うんですけど。

尉川：　うんうん。

田中：　鎖国してるとか、その時に「なにが正しいか、なにが大事なのか」っていうものを、しっかりと会得して。そして開国になり、それが「あてはまるものか、あてはまらないものかって取捨選択していく」なんかそんな絵がうかんで来ました（笑）

尉川：　うん、なるほどね。鎖国というと、どっちかっていうと、ネガティブに捉えられてしまうんだけど、結果的には、当時はそれが最善最適だったんですね。やっぱ、そこが、江戸幕府の幕閣たちには見えていたんでしょ。そこ素晴らしいと思うんですね。「嵐の時は閉じこもってこうぜ」と。

田中：　うん。そんな感じですよ。

尉川：　その後、幕末期になると、薩摩、長州にはイギリスがつかまりましたよね、幕府にはフランス。フランス人は比較的そうでもないけど、イギリス人は、ゲームの多くを作ったっていわれ

る位で、イギリス人はアングロサクソンとしてちょっと残虐なところもありますよね。

その幕末期、日本から両国に軍事顧問団を要請したんですよ、徳川幕府が。ところがイギリスは薩長を推した後で、日本を丸々いただくつもりだったんで、幕府の要請を断ってるんですね。

田中： ふうん。

尉川： フランスも幕府の旗色が悪いなとは思ったんだけど、当時のナポレオン3世が「江戸幕府が正式に頼んできたんだから、出さねえわけにはいかないだろ」って。

田中： 義に感じたんですね（笑）

尉川： そうそうそう（笑）フランス陸軍軍事顧問団を送り込んできたんですね。で、歴史では徳川幕府は刀や槍で闘ったなんて揶揄されますけど、ちゃんと西洋式軍隊を組織して健闘しているんですよ。歴史では教えないけど。伝習隊というんですけどね。

その後、日本は長州と薩摩が中心になって動かしていきます。長州ファイブって知ってますか。井上聞多、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔、野村弥吉らの長州出身の五人組。彼らはみんなイギリスに留学してるんですけど、その資金は「ジャーディン・マセソン商会」ってところが出してるんですよ。ここは、もともと東インド会社という名前でした。アヘン戦争って、あったでしょ？

田中： はい。

尉川： そのアヘン戦争を引き起こした会社が、ジャーディン・マセソン商会です。

田中： 悪いやつじゃないですかぁ。

尉川： 超悪いやつなんですよ（笑）てか、資本主義の権化ですね。その会社と繋がりが強いのが、長州だったんですね。それが今にも続いているんですよ、ずっと。これから先を話していくと、どうしても、フリーメイソンやスコットランドライトの話になってしまうんで、この電子書籍には似つかわしくないんでやめときますけども。

田中： いろんなものが、背景にあるんですよ。

尉川： うん。背景にあるんですね。その中でもしぶとく生きている日本っていうのを、ぼくは感じますね。今回のアメリカとの関係もそうですけども、民主党時代で、かなりボロボロだったんです、日本。

田中： うん。

尉川： 閣僚からして、取り締まり対象者だったんですから（笑）例えば佐々さんという人がいますよね。初代内閣安全保障室長の佐々淳行（さっさ あつゆき）さん。彼は、浅間山荘事件の警備実施を指揮した人ですね。

田中： これ、書いちゃって大丈夫なんですか？（笑）

尉川： あ、大丈夫ですよ（笑）ヤバい固有名称があったら、後で消しときます（爆）

田中： あはははは。

尉川： あははは。ネットで佐々さんご自身が話していたことだから大丈夫です。んで、いわゆる投石とかあるじゃないですか、デモが。

田中： うん。

尉川： こういう時にいつもね、逃げ足が速いやつがいたそうですよ。

田中： 煽っというて、逃げ足一番。

尉川： そう、いの一番に逃げると。んで、佐々さんが機動隊員に言ってたんだそうです。「今度こそ、あいつ、絶対に捕まえろ」って。でも絶対に捕まらないんですって。人を押しのけて先に逃げちゃうから。

田中： ふふふふ。

尉川： それが、〇〇。さらに、〇〇さんは、極左暴力集団のブント派のメンバーです。バリバリの活動家だったわけですね。これもネットには普通に情報が載ってますので大丈夫です。

田中： ふうん。

尉川： そんな連中が、政権とったのが、民主党政権時代ですよ。だから、もうボロボロだったですよ、あの頃の日本は。もうアメリカから見捨てられる、亡国の瀬戸際だったですからね。残念ながら、今、日本はアメリカから見捨てられたら、だめですからね。やっぱり、もうちょっと国力をつけないとね。

で、やっと、首の皮一枚というところで、自民党が政権を取って、元に戻して来つつあるんですけど。もち、政治の世界ですから、自民党がすべていいってことを言っているつもりはないんですが、民主党時代はかなりやばかったと（笑）

..... つづく ^^

◆日本を取り巻く極東アジア情勢

尉川： そうなると、やはり日本の底力っていうのがモノを言うんですね。うんと、朴槿恵大統領がアメリカに訪問した時、日本の悪口をずっと言ってるわけですね。アメリカからも強く言ってくれなきゃ日本は反省しないと。対米、対中国、対ロシア、対EU.....韓国政府の外交は、いわゆる『反日外交』ですよ。

田中： うん。

尉川： ところが、朴大統領がアメリカから帰国の途についた途端、オバマさんから電話があったそうなんですよ、安倍さんに。「朴さん、こんなこと言ってたぜ」って（笑）

田中： あはははは。

尉川： あはははは。ね、つまり、これが国力ってことですよ、たぶん。やっぱ、そこなんだろうと。「大丈夫かよ？」みたいに教えてくれるってことでしょ。

田中： ヤバいっていうか、気のない人間に、そんなこと、言ってきませんもんね。

尉川： 言わない、言わない。で、さらにたぶん、ぼくが思っているのは、おそらく韓国は北朝鮮から統一されますね。北朝鮮の方が、非常に外交がうまいでしょ。

田中： うん。狡猾で、暴力的っていうのかな。

尉川： うん。

田中： 駄々のこね方を知って感じがする。

尉川： そうそうそう。押すところと引くところ、知ってるでしょ。

田中： うん。なんか子供的なところがあって、子供もほんとに、いかん人の前では泣いたりしないじゃないですか。

尉川： うんうん。

田中： そういったのを、やってる感じがする。

尉川： ね。ほんと。韓国はね、ボロボロですよ。例えば、韓国の人によるいろんな事件、政治的なことについてもそうだけど、あまりにも幼稚なところが最近目立つんですよ。

田中： うん。

尉川： さっきの、オバマさんに、日本の悪口を延々と言っていたとかね。G20でも同じことをして、たくさんの反日を煽る。そして、竹島問題なんか、日本、知らなかったでしょ？

田中： うん。

尉川： なんで、あれがわざわざクローズアップされたのか？

田中： うん。

尉川： 李明博さんが上陸したからですよ。それまで多くの日本人は知らなかったと思いますよ。竹島問題自体を知らない人の方が多かったわけです。だから、韓国政府は知らん顔してればよかったんですよ。それをわざわざ火をつけるようなこと、するんですよ。そんな感じで、どうも外交上失策のようなことをやらかしちゃう。ちょっとおかしいんですよ。

田中： それは、どうして？

尉川： これはね、韓国出身の元日本駐留の武官のある方が言ってましたけども、韓国の多くの組織に、北朝鮮の工作員が入り込んでいると。政治にもマスコミにも新聞にも教育にも。

田中： うん。

尉川： そして、韓国が誤った政治を行う事を、積極的にやってるんですって。韓国自体もいろんなことしてますね。例えば、靖国神社にいて悪さしたりするわけでしょ。そんなのおかしいじゃないですか。

田中： おかしい。普通はやらんですよ。

尉川： 日本人は、工作員とかスパイとか聞くと「そんなのないから」って笑っちゃうわけですが、これ普通にありますからね（笑） そういう仕事もしてましたんで（笑）

んで、韓国には、『反日無罪』って言って、日本に対してだったら、どんな失礼なことしても、無罪にしようって空気感があるんですよ。こういったのって、すべて北朝鮮による工作だって、

その人言ってました。で、北による影響力が徐々に韓国内に浸透しつつあって、もう武力を使った統一戦争のようなものはないだろうとも言ってます。

実際にアメリカも一枚噛んでるんじゃないかって言ってます。なぜかというと、在韓米軍は2015年に作戦統帥権を韓国に返還するんです。今、在韓米軍いるでしょ。指揮権はどっちにあるかということ、米軍が持ってるんですよ。

田中： うん。

尉川： その在韓米軍が、「俺たちが持ってる軍の指揮権、返すわ」って言ってるんです。そしてグアムまで退くって。北朝鮮が核ミサイルを持つかどうかの瀬戸際の時に、米軍はなぜグアムまで退くんですかってことですよ。

田中： うん。

尉川： ちょっと、おかしいでしょ？ 明らかにおかしいんです。北朝鮮も、この間ミサイル打ち上げましたけども、核弾頭の小型化に成功したら、核ミサイル、持ちますよね。そしたら、ソウルまで7分で届いちゃう。もう完璧に北朝鮮が強くなる。韓国は絶対に核ミサイル持たせてもらえませんし、まだ作れませんからね。ロケット技術がないですから、日本とか外国に発注してるんです。そうすると、北朝鮮の方が、圧倒的に優位なんですよ。

で、一説に言われてるのは、半島は北朝鮮によって、これは統一される。更に、北朝鮮の上に、瀋陽（しんよう）ってところがあるんですけど、そこに『瀋陽軍区（しんようぐんく）』って軍隊が駐屯しているんですよ。中国人民解放軍のね。

この瀋陽軍区の兵隊さんは、北朝鮮の人たちと非常に仲いいんですよ。民族的に同じなんですよ。つまり日本人としても、DNAとしては、近いんです。今の韓国は新羅だったでしょ。だからDNAが全く違うんですけど。

上の瀋陽軍区にいる人たちと、差別されてる全羅道の人たちと、日本人は非常に近い。そして、この瀋陽軍区が動く可能性があるんです。この瀋陽軍区の解放軍って、人民解放軍最強といわれている部隊です。で、この瀋陽軍区は北京政府の言うことをあまり聞かないんですよ。

で、人民解放軍っていうのは、毛沢東が組織したいわゆる八路軍（はちろぐん）を前身としているんですが、これが解放軍の母体なんです。ですが、北京政府のものではないんですね。あくまでも中国共産党のものです。

で、瀋陽軍区と北朝鮮が合体して、半島に南下して行く。そして、新しい大高麗国っていうのをつくる計画があるとも噂されています。

田中： じゃあ、また新しい世界地図になる可能性も。

尉川： あくまで噂ですけどね。でも、可能性としてはある。中国も、チベット問題、ウイグル問題といろいろ抱えているでしょ？ アメリカの今の方針としては、中国を4分割か5分割に出来ればいいなとも考えてると思います。そうすると、マーケット広いままでしょ。

マーケットは広いまま、中国の力を削ぎ落とせるでしょ？ 加えて一度戦争になれば、米国債は紙切れでしょ。アメリカとしては債務帳消しになって凌げますわ。こういう大きな裏の動きには、ロシアも日本も乗っかってる可能性があるわけです。ぼくらが生きてる間に、なにかある可能性はあるかも知れませんね。知らないのは一般人だけって話で。

田中： ちょっときな臭いですね。

尉川： きな臭いね。でも、できるだけ武力を使わないでやるってことを考えてる節があるようですね。だから、武力を使わないために、いろいろ工作してるってことですね。で、ほぼ最終段階なんじゃないでしょうかね。ぼくらのような一般人から見ても、韓国の行動、おかしいでしょ？

田中： うん。

尉川： 明らかにおかしい。なぜかというと、韓国は自国が独立するために、日本とアメリカと組んでなきゃいけないんですよ。反日やり過ぎて日本を敵に回したら、ダメなんですから。独立を維持するためには、嫌いでも、日本と組んどかないといけない。もちろん、アメリカともです。覇権を推し進める中国に対しては、この三国がタッグを組んどかなきゃいけないんだけど、それに反するような行動をとり続けてるんですよ。

この間、朴大統領は、アメリカに行った帰りに、すぐに中国に行ったんです。日本には来てないでしょ？ これ、失策ですよ。「戦争になったら、だれが後方支援するんですか？」って話ですよ。

韓国が購入を決めたF35戦闘機の整備は、日本の三菱じゃないとできないんですよ。そういう条件で購入しているのに……ね。でも、韓国は、完璧に反日で目が眩むように仕組まれてるんで、中国に行っちゃった。中国に行ったら終わりなんです、すぐ属国化しますから。

田中： えっと、じゃあ韓国は完全に眩惑されてるってことですね。

尉川： うん！ま、自己責任ですよ。催眠状態でもなんでもなくて、「日本が嫌いだから、中国に事大しよう」って、中国に付いちゃったけど。今の世界の極はどこかっていうと、ソ連がなくなっただけで、アメリカと中国しかないですよ。中国が今、アメリカに盛んに言ってるのは、これからは、中国とアメリカの二大大国『G2』の時代にしようってことです。

で、どっちの陣営に付くかってことなんです、正直な話。コレ、現実問題ですよ。理想は、人類みな兄弟なんですけど、現実の政治の世界では「どっちに、付くの？」なんです。

田中： うん。

尉川： その時に「アメリカに付きたいです」って言っときながら、ススーって中国にすぐに行ったでしょう。これを「こうもり外交」っていうんですよ。こうなると、もうアメリカは信用しませんから、韓国を。

さる筋からの資料には、アメリカは韓国を同盟国として適切とみなさなくなったと書かれています。中途半端な米韓同盟は北朝鮮の核武装を推し進めることに繋がるといのがおもな理由です。その代わりに、韓国は中国の属国となるだろうが、これは朝鮮半島の非核化に大きく寄与するわけです。中国は絶対に半島に核を置きたくないからです。

田中： うん

尉川： その代わりに、前線に立つことになる日本に対して、アメリカはいくつか方針転換するって言ってます。日米安保の強化、軍事共同訓練の強化、日本の防衛力強化への協力、また戦後の軍事産業にかかる制限や規制を原則解除、容認、黙認という具合です。

これは第一次安倍内閣の時に交わされた日米合意らしいんですが、いま、このシナリオ通りに進んでいるのがわかるでしょ。もうアメリカは韓国を斬り捨てたわけです。

田中： ヤバいですね。

尉川： 韓国はヤバい。滅亡の淵です。だって、中国って国は、ウイグルやチベットを見たら、わかるとおり、民族同化政策をしますから。漢民族をダァって、そこに送りこんで、結婚させてくんで。血を薄めていくんですね。

田中： 誘拐結婚みたいなもんですか？

尉川： そうそう。それに対して異を唱えたり、反乱起こしたりすると、殺しますから、ほんとに。韓国は歴史的に、ずっと属国だったわけですよ。仕方ないですよ。本人たちが選んだんですから。で、やっと韓国として、独立して60数年、このまま行くかと思っていたわけです。

日本、アメリカと一緒にいれば、独立は担保されてたんですよ。ところが中国に行ってしまったら、独立どころの話ではないんです。その点、北朝鮮の方がしたたかですから、上手に諸外国を使って「じゃあ、朝鮮半島は全部うちがもらう」というようになって、世界史がまた新しく変わっていくんじゃないかな、と思いますけど。政治や経済、密接に繋がってますから。

田中： うん。

尉川： もう、あれこれ見越して、動いてると思います。

田中： ですね。

尉川： まあ、大きな転換期になるんじゃないかなって思いますね。極端なこといえば、このまま外交的に失策を続ければ、韓国はなくなる可能性が高いです。たぶん北朝鮮によって統一されて、おそらくキューバとかベトナムとか、ああいう社会主義体制を維持したまま、開放経済に向かっていくでしょう。

あるいは中国のような形でやって行くか、王制のようなものを真似て市場開放をしていくような感じになるんじゃないかと。アメリカは、韓国の斬り捨てを決定している節がありますし、北朝鮮は「日本と仲良くしとかなないといけない」とことは理解してますから。

田中： あの一、日本の国力って、なんですか？

尉川： やっぱ、ひと、なんじゃないかな。うん、結局、ぼくが思うに、人なんでしょうね。人がぶらさがってるところに文化がある。

例えばね、ある人の話からこんな話を聞いたことがあります。欧州のビジネスマンとの交渉をその人の友人がしていたそうなんです。英語はめちゃくちゃ下手くそらしいんですが、一生懸命体当たりで、交渉にあたっているんだそうです。

でね、引くべきところは引くけど、引いちゃいけないところは絶対引かないんですって。その姿を見た時に、英語下手くそなのに、なんかこの人って頼もしいなって感じたと言っていました。

やっぱ日本人の良さのひとつじゃないですかね。英語が苦手で、外国人に引け目を感じる事があったとしても、それを支えている国民たちが、いざとなった時に、ぐっと下支え出来るってところが、日本の国力の源泉なんじゃないかって。「人は城、人は石垣、人は堀」って言葉があるけど、ぼくは、まさにあれなんじゃないかと思いますね。

田中： ひとりひとりの資質が高いのかな。

尉川： うん。それもあるでしょうね。資質が高いからこそ、外に出てった時に一目置かれるってところ、あるでしょうから。それから、組織もね、大きいと思いますよ。

田中： 組織？

..... つづく ^^

◆日本が目指すべきはベネツィア方式のシステム重視思考

尉川： うん。このおもしろい例は、ベネツィア共和国ですね。ベネツィアって英雄がないんですよ。近代だと、フランスだとナポレオンとかいたでしょ？ イギリスもオスマントルコも王さまがいて。ベネツィアはそういう中で、英雄を作らないシステムを駆使して、丁々発止やって、ざっと1000年続いた立派な共和国を作ったんです。世界史上、初めて大使館を設置したのもベネツィア共和国です。最後は、ナポレオンに滅ぼされちゃったけどね。

田中： へえええ。

尉川： この国は、非常に政治と経済のバランスがとれた、いい国だったらしいんですけど、誰が、どの役職の座に座っても、ちゃんとある一定のパフォーマンスを発揮できるようなシステムを構築していたんですね。

田中： すげえ。

尉川： うん。「うちの国には英雄いない」ってことですよ。だって、「英雄が死んじゃったら、困るじゃん。でもシステムは残るよね。だから、システムを作りましょう」って。そういう面でいうと、日本でも法的に整備されたものもあるでしょうけども、昔からあるシステム、慣習のようなシステムだってありますよね。

例えば、Aさんが残業やってると。Bさんは自分の仕事が終わって帰ろうと思ったら、Aさんがひとり残って残業をしている。その時、多くの日本人は「なんか手伝いましょうか？」って、普通に言ったりするわけですよ。

田中： うん。

尉川： そういうのは、教えられても、出来ないでしょ？ もう小さい頃からやっとかないと。そういう無形のシステムがたくさんあるはずなんですよ、日本にはね。これが、組織として動く時に、凄い力になると思いますね。

田中： コミュニケーション。

尉川： うん。それもあるかもしれないし。相手に対して自然に関わって行こうとするところもあるかもしれないし、相手が困っているんだったら、「俺たちもひと肌ぬいでやろうか」って思う気持ちかも知れないし。

田中： うん。

尉川： サービス残業も悪の権化みたいに言われてるけど。アメリカが評価制度を持ってきて、「サービス残業を悪だ」と言ったのはなぜかという、サービス残業なんかされたら、アメリカ人は太刀打ちできないじゃないですか。だから「悪だ」って槍玉にあげられてますが、本当にそうかっていうと、そんなことはないと思うんですね。

田中： 違うと思う。

尉川： うん。今まで、「だめだ、だめだ」って批判されてきた中に、組織を円滑に回すためのシステムが眠ってるような気がしますけどね。

田中： うん。私、無駄な時間もすごい大事な気がして。流れ作業、ベルトコンベアースタイルの工場、知り合いが働いていて、休憩時間以外ほとんど話もしないそうで。

尉川： あー、なるほど。

田中： 一見無駄に思える話をしてる時に、ふと人の話を聞いてたりする時に、閃くようなものもあると思ってて。

尉川： あるね！

田中： 話してて、見えてくるような。この間、佐藤可士和（さとうかしわ）さんの記事とか読んでたら、やっぱり話すんですって。スタジオジブリの鈴木敏夫さんも。「話すことで、見えてくる」って言ってました。だから、一見無駄に見えるおしゃべりの中に、こういったものが、入ってる。

尉川： 入ってる。うん。だから「無用の用」ともいうし。そういう面では、日本は圧力、外圧でね、いろんな習慣とかビジネススタイルなんかも強制的に変えられてきたけども。でも、そうじゃない時代の方が明らかに、よかったこともあるわけですから。単純に結果から見るとね。これ極論って言われるかもしれないけど、ぼく、終身雇用も悪くないと思います。究極は。

田中： うん。

尉川： それやって来てた時、日本強かったじゃないですか。結局、なんでも歩合、実力主義で立ち上がって来たのは、格差社会でしょ。そして、中産階級の没落です。

田中： うん。弊害もあるんですけど、終身雇用というものは、なにをもたらすかっていうと、定年まで安心して働くことが出来るという、安心感というものが提供できるんですよね。

尉川： そうそうそう。となると結局、人の存在がシステムとして、機能するわけでしょ。能力主義っていうのは、英雄を生み出すにはもってこいの制度です。「俺が勝った」、「俺が1週間で3億稼げた理由」って本とか出てますけど、あんな英雄はほんの一握りであって。

田中： うん。

尉川： それよりも日本は、ベネツィア式にね、人重視のシステムの方に重点を置いていく方がいいと思いますね。英雄はいらないから。それに、日本人は英雄をつぶすんですよ、英雄が嫌いだから（笑）

田中： なんか、蟻の群れのようなですね。

尉川： そう！システムで勝つしかないですね、日本人は。ベネツィア人と同じで。だから終身雇用して、一回雇用したら、「しっかり面倒みるよ」って。そういう安定した人たちが中産階級として経済全体を下支えするわけです。

田中： うん。

尉川： もちろん、斬新な発想する会社だったとしたら、それは能力主義でいいじゃないですか。でも、「みんな右に倣え」で、能力主義を取り入れる必要はないんじゃないかって思います。

田中： 脳科学者の「池谷裕二」さん、糸井重里さんと「海馬」って本書いた人ですけど。

尉川： うんうんうん。あのひと。

田中： あの人の本に、蟻の生態の話があって。蟻って食べ物を見つけると、においを残していくんですよね。そのにおいをたどって、そろそろと行列つくっていくんだけど、中に、突然変異的に道を外れるやつがいる。それは食べ物へのショートカットできる可能性なんだけど。

尉川： うんうん。

田中： そいつがいることで、とんでもないショートカット出来ることがある。脳のシステムから見た時に、人間の脳には「ゆらぎ」の部分があって、突然変異があるって。思うに、それが危機的なことだったり、種の保存が危なくなった時に働くのかなって。種を絶やさないために、最

後の安全弁というか、そういうシステムがあるというのが（笑）

尉川： まさにね、そういう発想ですよ。それでいくと、ほんとごちゃまぜでいいわけですから。それこそ、八百万の神々みたいに、システムを重視していく会社がしっかりあると。これは母数として多い方がいいけど。

田中： 下支え的に。

尉川： そうそうそう。その中で、スティーブ・ジョブズさんみたいな、ああいう革新的なことをする会社がいくつかあると。そういったものが上手く塩梅を保ちながら、システムとして、またより大きなシステムとして動いていくと、日本はさらに復活できるんじゃないかと思えますね。

田中： うん。危なくなる時って、働くんじゃないかなって思うんですよ。

尉川： うんうん。

田中： 種が生き残るために、変化してきたように。織田信長が出て来たり、坂本竜馬が出て来たりとか。

尉川： ほんと、そうですね。

田中： だから、「大変だったりするんだけど、そんなに悲観的にならなくていいんじゃない」みたいな。

尉川： そう。それはたぶん、日本の安定感に繋がるんじゃないですか。例えば、これがさっき話した韓国になると、怖いですよ。だって、そういうのいないですから。

田中： あー。

尉川： 過去の歴史見ても、いないでしょ？ そして、みんな、突き進んでしまうでしょ？ 一斉に、ダーって。だから、非常に危険極まりないんだけど。日本の場合は、よく日本を揶揄する言葉で「みんな飛び込んでますよって」と、飛び込む」とか言いますが。

田中： ええ。

尉川： 確かに普段はそうかもしれないけど、いよいよ危ないって時に日本人は、さっきの蟻の

例も出たように、違った行動するやつが出てくるわけですよ。乱数がどんどん発生するわけで。

田中： そうそう。だからね、鎖国の時でも密航するやつもいるわけですよ。

尉川： そうそう。その通りなんです。やっぱ、そういったところが日本人の国力の安定さを下支えしているんじゃないかなあって思いますね。

田中： それに、日本人は腹の据えどころを知ってる気がします。踏ん張りどころというか、「ここは譲っちゃいけない」みたいな。

尉川： うんうん。そうっすね。多くは譲っても、「ここはだめだ」と。つまり、そこがわかってないとだめですよ。これ以上やったらいけないというところがわかってるんでしょうね。わかってないと、やられちゃう。国際政治は、パワーバランスですから。

一番わかりやすい例としては、ガキ大将のケンカですよ。国際政治もそうですしね。力の強いものが勝つわけですよ。どんだけ理想を語ったとしても。幕末から明治にかけて、日本が本気になった姿を見せた時、「こいつら、怒らせたら怖い」って思わせたわけですよ。やっぱりね、それがある。

日露戦争に勝っちゃったとかね。連中も「まさか俺たちにケンカ売ってこないだろう」って思ってたたら、いきなりケンカ売ってきやがったとか、そしたら神風特攻とかで体当たりしてくる。もう全然理解不能なわけでしょ？ 相手からすると。

ほんとに、日本人を怒らせたら怖いってというのは、当然アメリカもヨーロッパも知ってますから、そこはやっぱり怒らせないようにってというのは、思ってたりますよ。「今はちょっとおとなしい振りしてるけど、あいつら、怖い」って。

田中： 「牙は持ってるんだよね」みたいな。

尉川： そうそう。そういうのもあるし、技術の面でも、零戦みたいな作っちゃうし。アメリカは、「絶対に国産の飛行機なんか、日本に作らせるもんか」って思ってるわけですよ。日本は作りたいけど、作るなって言われてますから作れない。戦車はいいって言われてますけど、戦闘機は作るなど。

で、どうするかっていうと、買うしかないでしょ？ アメリカから。まあ、よそから買うしかない。で、日本は「F22、売ってくれ」って言ったんです。F22はステルスですから、中国空軍も配備し始めてますから、ほしいって。でもアメリカは「それはダメだ」って首を振る。F22は、

アメリカとカナダとイスラエルの白人国家しか持たせないって、決めてるんですよ（笑）

田中： ふふふ。いじわる（笑）

尉川： 笑 「じゃあ、いいよー」って。EUがつくった戦闘機があるんですけど、これステルスじゃないんですけどね、「それ、買おうかなー」っていったら、アメリカは「F35を作ってやるから、それにしろ」って。F35はステルスですね。でも、そこまでやっても、日本に絶対は作らせない。なんでか？日本に戦闘機なんか作らせたなら、危ないって思ってるから。

田中： もっと性能のいいもの作られると思ってる？

尉川： 絶対！絶対作るって、思ってます。

田中： だけど水面下で、絶対やってそうですよね。

尉川： うん！可能性はありますよ。だから、今回のイプシロンもそうですよ。「イプシロンは、軍事転用はしませんし、出来ません」っていうのは、もちろん建前ですよ。

田中： うん。

尉川： 中国が持ってるICBMで、射程最高7,800キロかな。日本が本気でやるとしたら、1万キロ以上いきますよね。

田中： へええ。

尉川： そうなんですよ、1万から1万4000キロぐらいだと思いますけど。つまり「出来ますよー」ってことです。もちろん、日本は持ってませんが、出来る。且つ、日本が作るとなると、5000キロトンの核弾頭を搭載しても、それくらいの長距離をピンポイントで、誤差90メートルで直撃できる戦略核ミサイルをつくる能力持ってるんですよ。

田中： ふふふ。

尉川： ははは。

田中： なんか、怖いですね、日本（笑）

尉川： そう。今回のイプシロンは、中国とかの軍事的関係者は、これを「日本はいつでも核ミ

サイルを持てる能力がある」と判断しています。これも『核の抑止力』として使えるわけです。

田中： 牽制できる。

尉川： そう。これ、牽制球なんです、確実に。

田中： おもしろいなあ。

尉川： そうなんです。たった、こんだけのニュースなんだけど。

田中： その後ろにどれだけのものが。

尉川： 情報が隠されてるのかって話ですよねえ。

田中： おもしろい——（笑）

尉川： あの『はやぶさ』もそうですよ。あれは、何万キロと飛ばしてるでしょ。あんな小さな『小惑星イトカワ』に向けて。あれ一番長い幅で500メートルくらいだったかな。小さい小惑星ですよ。そこにピシューってピンポイントに持ってたんです。で、そのものを採って、更にピンポイントでオーストラリアの平原に戻したでしょ？ これ、恐ろしいでしょ？ ははは（笑）

田中： 「狙ってるぞ、おまえ。ピンポイントでいっちゃうんだぜ」みたいな。

尉川： そうそうそう。そういうことですよ。「一周ぐるって回って、いっちゃうぞ」みたいな。

田中： なんか、侮れないっていう。

尉川： そんなですよ。ねえ。

田中： 底の見えなさが、怖いというか。

尉川： 怖い、怖い。

田中： 頼もしいというか（笑）

尉川： そう、そして頼もしい。そういう意味では、国民としても頼もしい。みんなイプシロンでね、「イプシロン、すげー」「ロケット、飛んでったー」って、普通の人はそのでいいんですよ、それでいいじゃないですか。でも韓国辺りは「これは、もう軍用技術だ。うちを狙ってくるつもりなんだ」って言うてるんですよ。ほんとに言うてるんですよ。

韓国の海軍のお偉いさんなんですけど、この人が作戦司令官に何て言ってたかっていうと、「日本が韓国を挑発するのは、2018年以降だ。なぜなら大韓米軍司令部が2015年12月に解体されて、指揮権が韓国にくるから、敵国である日本より優れた戦力が必要になるだろう。私（司令官）が想定するシナリオは、日本の右翼勢力が分譲して、奇襲的に竹島に上陸する。これを保護する目的で海保の巡視船、海自の軍艦が出動してくるだろう。我々は今こそ日本との戦争に備えて……」こんなことを言ってますから。

田中： ふふ。戦う事では、考えていないですね。

尉川： もう。全然。考えてないでしょ（笑）だから今回のイプシロンでも、ガーッと言ってきました。なんで、日本が韓国と戦わないといけないのか？

田中： 戦うよりも友好関係を結んだ方がいいじゃんって思いますけどね。

尉川： そうそうそう。そして、韓国に関しては関わらない方がいいってというのが正解ですよ。それ以外の国とは友好関係が一番いいです。韓国にとっても、日本といざこざしても、なんもいいことないんですよ。

田中： メリット、ないですよ。

尉川： ないです。経済的にも。にもかかわらず、いつもケンカ腰でしょ。さらに戦争やる気ですからね。日韓で戦争になるわけじゃないですよ。だから、武力衝突と戦争の区別をつけとかないといかんです。戦争は、あくまでも、国と国とが宣戦布告して、外交の手段のひとつとして行うのが戦争ですから。武力衝突とは、部隊と部隊が偶発的に発砲したりする。

ちょっと前、延坪島事件（ヨンピョンドジケン）ってあったでしょ。あれ、韓国と北朝鮮の戦争じゃなくてね、武力衝突ですから。偶発的な軍事衝突。戦争になるということは、韓国政府が、日本政府に対して正式に宣戦布告をしてきた時にだけ、戦争になるんですよ。

田中： ふうん。お互いの名乗りが必要ってことですね。

尉川： そうそうそう。名乗りが必要です。

田中： じゃあ、片方が吠えてても、名乗らなければ、戦争にはならんって事ですね。

尉川： ならないです。現代ではならないです。例えば、韓国が仮に、武装した兵隊を九州に上陸させてきたとする。これは完璧に侵略行為でしょ。政府としては「すぐに部隊を撤退させろ」って言いますよ。でもどんどん侵攻してきたと。これは武力侵攻とみなして、宣戦布告して、相手に通告して、国連にも報告して、それではじめて、日本は戦争行動が出来るってことですね。

ただし、日本が危惧してるのは、国連安保理の敵国条項なんです。通常、国連が軍を出すためには、安全保障理事会の決定があるんですよ。最終的に常任理事国5か国がOKを出さないとだめなんです。で、日本は、UNを『国連』って訳してますけど、これ本当は『連合国』という意味なんです。つまり、UNは、戦勝国であった連合国の組織なんでね。

で、普通、軍を動かすには、安保理の決議が要るんだけど、敵国に戦争を仕掛ける場合は、安保理の決議はいらない。且つ、国連はその攻撃を止めることは出来ないって決まりがあるんですよ。

田中： うん。

尉川： つまり、もし仮に安保理常任理事国の中国が、「日本から侵略された、それに対して反撃します」って日本に武力侵攻した場合、国連は、国連軍を出せないんですよ。だから、日本は自力で守るしかない。なぜかというと、止められないことが国連憲章に決められているから。でも困るでしょ？

田中： うん。

尉川： じゃあ、どうするかっていうと、日米安保条約を結んどかないといけない。国連は非難決議も出せないし、手も出せませんから。だから今日本は「敵国条項を外せ」って言ってますが、中国は、それがあった方が都合がいいじゃないですか。

尖閣諸島を中国の領土だと世界的に認めさせれば、そこに日本が入ってきたら、やっつけることができるでしょ？ だから中国としては絶対に外したくないんで「絶対に、外すな」って反対してるのが、中国なんです。

田中： そこでも、思惑があるんですね。

尉川： あるんですよ。だからいろんな情報には、こんな裏があってね、こういう裏があるか

らこそ、おもしろいっちゃ、おもしろいってことはあるんですけど。

田中： 頭脳戦でもありますよね。

尉川： 完璧な頭脳戦ですよ。

田中： 頭脳戦、情報戦。

尉川： そう！だから、ほんとに武器を使った戦なんてのは、もう終りの部分ですよ。最後の9割、詰将棋と同じですよ。その前にこういうような丁々発止の裏のやりとりがあって。ほんと三国志の世界ですね。ははは。

田中： 一見平和に見えるんだけど、水面下ではずっとそれが続いているってことなんですね。

尉川： 続いている、続いている。

田中： その平和を維持するための動きってことでもあるってことですね。

尉川： そうそう。どうやって維持するのか。「ミサイル、軍拡なんてとんでもない」って言ってますけど、残念ですが、極東アジアは軍拡時代に突入してますから。

田中： うん。

尉川： 個人的には、ぼくも平和がいいですよ。ただ、アジア、中国が軍拡になってる中で、日本だけがそのまま軍縮してしまったら、どうなるか？誰が泣くのかって話ですよ。自分らの子供やら、孫やらが攻められたりしたら、後悔してもしきれないですよって話です。

だったら、しっかり平和を維持するためには、やっぱり強くないといけません。ジャイアンみたいに、ある程度強い、そして頭がキレる、技術力もある。で、戦争以外の部分で、日本のいう事をきかせるような切り札をしっかりと何枚か持っていると。

田中： うん。

尉川： 相手が日本を攻めようかなって思って、いろんな国をまとめようとしてる時に、日本が「ああ、そう。あっちの言うことをきくんだったら、いいよ。もう援助しない」とキッパリ言う。「あー、待ってください。冗談ですよー」とかいうやりとりで、平和が維持されるんですね。残念ながらね。

..... つづく ^^

◆根回しがこそが日本人の得意技

田中： でも、そうやってみると、そういうのは、「日本、得意かもしんない」って気がしてきた。

尉川： うん。意外と、寝技得意ですね、下手くそにみえてね。

田中： うん。

尉川： 元々、得意だったんですよ。だってね。明治・大正・昭和ってそれをやって、うまく列強国になったんですから。

田中： だって、根回しって言葉もありますからね（笑）

尉川： そう、根回しの日本ですよ（笑） 今回のオリンピック誘致だって、根回しの勝利でしょ、あれ。韓国は反対してましたけど、北朝鮮は賛成してるんですよ。日本に票入れてますから。

田中： ふうん（笑）

尉川： さらにびっくりすることに、アフリカに北朝鮮と仲がいい国があって、北朝鮮から根回しをしてもらって、そのアフリカ諸国の票を3票とってきたんですよ。で、いわゆる北朝鮮票としてみれば、北朝鮮、今回、日本に4票入れてるんですよ。ロシアも根回しして票とってますし。

田中： すげー。あの、富士山の世界遺産登録で、最初「富士山」だけだったのに、ぎりぎりで「三保松原」も追加認定されたってことがありましたよね。

尉川： あー（笑）

田中： それがどうしてOKになったのかっていうと、ロビー外交って言って。

尉川： うんうん。

田中： その交渉の人たちが、会議以外のところで、凄く動いてたって。

尉川： なるほどねえ。

田中： それもね、おもしろいなって思ったのが、一番難関のところに行ったんですって、一番最初に。

尉川： おー、まず「ボスをたおせ」と。

田中： そう！で、「どこを満たせば認定してもらえるんでしょうか？」、「なにをもって、反対とされているんですか？」みたいな。それが結構ストレートだったみたいですよ。

尉川： うーん。素晴らしいね。今の話聞いて思うけど、オリンピックでもそうだったけど、基本、日本ってロビー活動、得意でしょ。根回しが。

田中： うん。

尉川： 得意なんですよ。ただしね、唯一全く手を付けてない部分が、対韓国なんですね。まあ対中国もありますが、南京虐殺に関しては、かなりロビー活動して、あれは捏造だということを、ある程度諸外国にわかってもらってるんですけど。慰安婦問題に関しては、まだまだです。今、安倍さんが対応しつつあるから、沈静化していくでしょうけどね。

韓国は、竹島問題騒ぎ立てたりとか、天皇を冒瀆する発言もあつたりと、これは北朝鮮の工作だと思えますけど。なんていうかな、これはもちろん、おもしろくないけど、長い目で見ると日本にとっては利益になるでしょう。

田中： 相手が、オウンゴール決めてくれたみたいな？

尉川： そうそう。そのおかげで、日本はそれまで軍縮だったけど、やっと何百億かだけど、予算がつきはじめてたりとかね。また、中国が尖閣で騒ぐからこそ、日本も真面目に軍拡を考えようという雰囲気になってきたでしょう。そういうところからいくとね、日本も少しは頼もしい国になっていくかなあと。できればね、そんな武力なんて使わずにやっていきたいなと思えますけど。ふりかかる火の粉は、避けるくらいのは持ってないと、危ないかなと思えますね。

田中： なんか、おもしろいですね。

尉川： おもしろいですよねえ。まあ、これが、どんなふうにとまるかどうか、ちょっとわからないですけどね（笑）

田中： ほんっとですね。なんですかねえ。まあ、でもおもしろかったですよ。

尉川： ははは。まあ、特別編ですからね。なんか、スペシャル・バージョンって感じで。

田中： そうですね。対談、みたいなの。

尉川： ははは。結構ぼくの情報もね、敢えて触れずにスルーしてるところもありますけど、基本的にその筋の人とかね、いろいろなところから聞いた情報を、言える範囲で話してます。裏付けのある情報も結構ありますから。

田中： はい。尉川さんのブログアドレスものっけていただいて。

尉川： ああ、そうですね。あ、あと質問がありましたよね。

田中： ああ、いいんですか？

尉川： うん。あれもやりましょう。せっかくなんで。

．．．．． つづく ^^

こちら、好奇心でかきだした質問表です^^

尉川さんにもインタビュー後、おつきあいいただきました。

まずはどうぞ、みなさんもたのしんでくださいませ★★

<いろいろ質問表>

- ・月並みですが、小さい頃はどんなこどもでしたか
- ・好きな本を一冊選んでください
- ・いつも必ずする「習慣」はありますか
- ・ねこ派ですか？いぬ派ですか
- ・今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたか
- ・それのどの部分が大変だと感じたのでしょうか
- ・それをどうやって乗り越えたんですか
- ・その時、大切にしていたことは何ですか
- ・今頭の中にうかんでいる人はだれですか
- ・その人は、何か言っていますか
- ・3つ願いが叶うとしたら、何を願いますか
- ・人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか
- ・人として、これは譲れないっしょ??っていうのがあったら、何ですか
- ・RPGでパーティを組むとしたら、どんなキャラクターを選びますか
- ・因みにそのなかで、あなたの役割（キャラ）はなんですか
- ・それはどんな冒険になるのでしょうか
- ・「攻め」と「守り」自分はどちらだと思えますか
- ・全く何の制約もないとしたら、何をしますか
- ・聞くとムカッってくる言葉ってありますか
- ・どんな時にイラッとしますか
- ・落ち込んだ時、どうやってリセットしていますか
- ・何をしている時が一番たのしいと感じますか
- ・今一番欲しいものは何ですか
- ・あなたの萌えポイントをおしえて下さい
- ・今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、2つ語って下さい
- ・そこで何に気付きましたか
- ・今の自分を突き動かしているものは、何だと思えますか
- ・今死んでも悔いはありませんか
- ・身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一か月だとしたら、何をしますか

- ・世界に向けて演説をするとしたら、何を一番伝えたいですか
- ・生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか
- ・人間以外のものに生まれ変われるとしたら、なにがいいですか
- ・朝起きたら、雨が降っていました、どんなことを思いますか
- ・世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか
- ・自分の性格を象徴するようなエピソードがあったら、おしえてください
- ・自分のキャラを一言でいうなら
- ・今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか
- ・今日のこの時間で、なにか気付いたことはあったらおしえてください
- ・一年後、どんな自分にいるでしょうか
- ・最後に何か一言お願いします ^^

.....

つづきは尉川さんのおこたえデス ^^

田中： んーっと、どれからいこうかな。

小さい頃はどんな子どもでしたかっていうのは、ブログ拝見したら、好奇心旺盛な子どもだったというのはわかったので（笑）

尉川： わははは。

田中： 恐竜博士だったとか。

尉川： 恐竜博士。クイズ番組とかの、ああいう感じです。あと、盗掘とかやってましたけどね。

田中： 盗掘？ え？ なんか掘るんですか？

尉川： そう。遺跡のあととか。学校の授業で、矢じりとか出てきたらね、やっぱ、本物の矢じりがほしくなるんですよ。

田中： それはね、きっと尉川さんだけです（笑）

尉川： ははは。

田中： 私、別にほしいと思わない（笑）

尉川： ははは。で、たまたま家の近くに遺跡があってね。そこに友達と一緒に行って。学芸員さんとかいるでしょ？ あの人たちが、5時とか6時に帰るじゃないですか。

田中： ええ。

尉川： その人たちが帰った後に。昔、ほら、結構ほったらかしですからね。自由に入って掘ったりしてましたね。まあ、めぼしいものは全部採られてたんで、なんちゃなかつたんですけどね。盗掘したりしてましたけどね。

田中： へえ。すごい。

尉川： ははは。

田中： おもしろいな。

いつも必ずする「習慣」はありますか。

尉川： いつも必ずする習慣はですね。まあ、犬の散歩ですね。

田中： 笑 瞑想とか、そんなやつが返ってくるかなって思っていました。

尉川： あ、般若心経をお唱えしますね。いつも必ずってわけではないですけど。気付いた時には。

田中： それは、朝とか？

尉川： 朝とか。神棚も置いてますんで、神棚に祝詞をあげて、般若心経をお唱えするっていうのは、よくしますね。

田中： へえ。それはいつから？

尉川： あれ、いつからかなあ。起業してからくらいじゃないかな。

田中： そっか。

今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたかっていうのは、今までお聞きしてるんで、割愛させていただいて（笑）

尉川： あはははは。割愛しましょう（笑）

田中： じゃあ、3つ願いが叶うとしたら

尉川： 3つ願いが叶うとしたらあ、あー、ひとつは自分のこととすると、小説作家として生活していけたらと思いますね。

田中： そうですよ。

尉川： うん。これ自己実現って意味でね。あと日本も好きなんですけど、夏の暑い時はフランスとかイタリアとか、ちょっと上の方行ってね、きれいなパリジェンヌあたりで目の保養をしながら、生活してね、秋ぐらいのいい季節に、日本に帰ってくるみたいな。後は、家族の健康でしようかね。

ま、一族が大過なく過ごせると。心身共に健康であるという事が、大切かと思えますね。3つめがあるとすると、日本がより良い国になってね、子供たち、孫子の代までに、いい意味で国をバ

トタッチしていく、こういうのがあれば、できればいいと思いますね。

田中： ありがとうございます。

人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか

尉川： うん。ぼくは、目かな、やっぱ。

田中： 目？

尉川： うん。目を見てますね。昔は、頭っから信じ込んでたんですよ。「どんな人でも、まず信じてかかる」ってところが多かったんですけどね。

田中： それはそういうふうになっちゃう？ それとも、そういうふうになろうと？

尉川： あ、そういうふうにならされた。

田中： あー。性善説で、みたいな。

尉川： そうそうそう。だから、世の中に出て、特に独立したりすると、それだけでは渡っていけないっていうのに、気づいたんですよ（笑）

田中： ふふふふ。

尉川： いや、これは笑い話みたいなんですけど（笑） それだけで、渡っちゃったら、ほんと危ないなって思ったんです。丸腰で歩いちゃ危ない。信用してもいいんだけど、段階を追って、段々と信用するってことが、大切だなって気づいたんですね。

田中： ふふふ。

尉川： ははは。「頭っから信用するのは、だめよ」みたいな（笑） 「信用してるっていうけど、あの人の何を知ってるの？」ってなった時に「うーん」って、なっちゃうでしょう？ だんだん、つきあう過程の中で、門を開いていくのがいいのかなって。

今は、どちらかというと、相手の目を見て「この人、本当に信用に足る人物かなあ」と、そして相手とコミュニケーションを交わして、その人の言葉の裏で、裏打ちされた思考とか、姿勢、あるいは価値観、そういったものが自分とマッチングできるかどうかですね。で、なにより、ほんとに裏切らない人かどうか……うん、ものすごく重要。

田中： うん。

尉川： 特に、ぼくみたいに小さな商いをやってるような人っていうのは、1回の裏切りで大きなことになるっていうのは結構ありますからね。その辺はシビアに見てますね。

田中： そっか。信用に足る人かどうかを、徐々に。

尉川： 見極めていく。

田中： それは、こう、データではない感じですよ。

尉川： うん。データじゃないでしょうね。うん、つきあいの中で「あら？」とかね、「なんか、こういうところ？」みたいな。例えば、人の悪口まではいかなくても、人の批評をよくするとか、あるいは「なんとかさんが、こうでさ」なんてことを、ぼろっというとかさ。それってぼくに直接言う話ではなかったりするでしょ？

田中： うん。するする。

尉川： そういう時に「なんで、この人、ぼくに言うのかな？」と。っていうことは、「他にも言ってるだろうな」って思うでしょ。

田中： うん。

尉川： だから「ぼくも、そう言われてる可能性あるな」って思うと、「ちょっと距離おいた方が、安全かな」とか。まあ、そういう細かいところで、どうかですよ。

田中： 人として、これは譲れないっしょ??っていうのがあるとしたら、何ですか。

尉川： あー。人として、これは譲れない……そう、ですね。いつもそういうの読んで、みんな、パッと答えてるけど。あらためて考えてみると……。うん、ま、そうだな。ぼく自身にとっては、生き様、死に様でしょうかね。

田中： ふふ。生き様、死に様？

尉川： うんうん。つまり、棺桶に入った時に、「いい人生だったな」と言えるかどうかだろうなと思ってますね。それは別に大業を成し遂げるとか、何百億企業を作ったとかではなくてね。

単に、ぼくが作家としてたゆまぬ努力をしていたとか、こう、自分に嘘がつけない生き様。

田中： うん。

尉川： その部分は、凄く大切な気がしますし、生き様を考えると、「どう死ぬか？」ってことですね。

田中： あー。

尉川： 死に際をいかに、「武士らしく死ぬか」

田中： ふふっ。武士なんだー（笑）

尉川： はははは。それは別に戦で死ぬわけじゃないですよ（笑）

田中： うん。生き様としてね。

尉川： 潔く、死ぬべき時に死ぬか、どうかって意味で。

田中： その潔く、死ぬべき時に死ぬって。私時々「自死」っていうことを考えたりすることがあるんですけど。

尉川： うんうん。

田中： そういったのも、あり？

尉川： あー、そうね。ぼくの場合は、ほんとに全身チューブの管付きで、延命のための延命になり、正常な思考もなかなかつかないと。こういう場合はあり。身体が動く、頭が動くうちは、ないですけどね。だから、ぼく子供にいつも言ってるのが「延命だけはやめてくれ」って。「機械で維持しないと生きてられなくなったら、すぐ殺してくれ」って言ってますね。これは最初に言っとかないと。

田中： 私もそれ、言ってて。あと「臓器提供もして」って言ってるんですけど、夫がだめってものの。「いいじゃん。腎臓だったら、2人も助かるんだよ」って言うんですけど。

尉川： ぼく、まだ臓器提供については考えていないですけど、確かに「生き様をどうするか？」っていうところに関しては、いつまでもしがみついてもいい。なんか、そういう

発想って、たぶん、日本的だと思いますよ。

田中： 私もなんか、わかる気がする。

尉川： ね、たぶん日本人って、こういう話になった時には、たぶん同じようなことをいうんじゃないかと。全身チューブとかそこまでして生きなくてもいいし、さっさと死んだ方がいいし、そこ日本的発想かなって思います。こう無常観というか。諸行は無常でね、人も必ず死ぬと。この辺の無常観というのは、日本人は持ってるんじゃないかなって思いますけどね。

田中： うん。

..... つづく ^^

尉川： 持ってない人が、たまにいるんですよ。で、持ってない人が、実は今、成功してるんですよ。

田中： してるんですか？

尉川： そう。なんでかっていうと、資本主義だから。極端に言うとね。これ、悪く言うつもりはないけど、基本的に資本主義は、ごくごくシンプルに言えば、金がすべての世界でしょ？ 道徳的なことと金銭的なこと、どっちが大事ですかって聞いて「金です」って答えるのが資本主義ですよ。今は、それがどんどん進んでいて、いわゆる「新自由主義」とか言いますよね。

この「自由主義」は、単純に言うと、「なんでも自由にさせてくれよ」ってことです。商売人の自由にさせてくれたら、ハッピー、これ自由主義ですね。だから、そのためには規制をかけない方がいいでしょ、国が。規制をかけるということは、自由じゃないからね。

田中： うん。

尉川： だから、どれだけ身体に悪いものを買ったとしても、それをみんなが「おいしい、おいしい」って飲めば、売れるわけだから。

田中： Cレオンみたいに？（笑）

尉川： そうそう（笑） そうすると健康的には危険ですけど、売っていいわけですよ。自由主義ですから。例えば麻薬とか、普通のドラッグストアで売っちゃったら、みんな買いに行く。どんどん売れて儲かるでしょ。「これでいいじゃん、儲かるし」っていうのが自由主義や資本主義の根本的な土台となる考え。こちら小さな政府を目指すわけですよ。国の介入はない方がいいから。

でも、これに対して、「それはちょっとやばいんじゃない？ 副作用もあるし、迷惑する人たくさんいるから」って規制をかけましょうってするのが、どちらかといえば「社会主義」的な考えですよ。で、こちらは大きな政府を目指すわけですよ。

田中： なんか、今、私の頭の中には「爬虫類の脳」みたいなのが、うかんで来ました。

尉川： ああ。いいですねー。そうなんです。資本主義は、結局爬虫類脳でしょ。だから、逆に爬虫類脳に徹した人の方が、成功するんですよ。もちろん全部が全部ではないですけど、いい人ほど成功しづらいです。例外もあるんですけど、単純にいうと、アフィリエイトとかネットワークビジネスとか新しい独立起業の多くは、より貪欲にガリガリ亡者で突き進んで行く方が成功する

んですよ。

田中： ぷ。それ、わかる気がします（笑）

尉川： うん。爬虫類で行ったほうが成功する。

田中： 規制がないから。なんていうのかな、「なんでも、あり」なやり方をするんですよね。

尉川： そうそう。ルールなし、フルコン空手みたいなやつ。そっちのが勝つでしょ。ぼくたちのように、人がいいと言わないけど（笑）、道徳的、情緒的、倫理的なところに触れると鈍るじゃないですか、普通の人間は。そうすると、そこが足引っ張るんですよ。

田中： うん。そこは凄く感じますね。

尉川： うんうん。そうなんですよ。だからなんでアメリカの企業がバンバン行くかっていうと、もうローラーのように潰してくからですよ。TPPとか、名前忘れちゃったけど、日本の健康保険制度とか、ああいったものが自分たちの利益に反してると思ったら、それを提訴出来るでしょ？ そういったことを考えつく発想が、爬虫類ですね。

田中： えー。難しいですね。その中で。私たちの行く道は、とても、険しいんですね。

尉川： 険しいんですよ！

田中： あははは。

尉川： 険しい。険しいけど、ニーズは多い。だから、ぼくは、アメリカとは仲良く必要はあると思うんですよ。アメリカなくして、まだ立てません、正直な話。でも、ぼくフランスとかとも仲良くしていいと思うんですよ。あとロシア、今凄くいいですね。プーチンさん、凄く信頼できるでしょ。あの人、「約束は滅多にしないけど、した約束は絶対守る」って言われてる人らしいですよ。

田中： へええ。

尉川： 日本のことはある程度買ってくれてるんですよ。だから、そういうふうにしていくと、ちょっと違いますよね。アメリカにべったりだと、資本主義、自由主義、能力主義になってくるでしょ。

だけど、日本の生き残る道は、塩野七海さんも言ってましたけど、「ベネツィア方式をとりなさい」ですから。経済しっかりやって、防衛もしっかりお金かけて、同時に誰がやっても回るシステムつくって、英雄をつくらないと。そうすれば、これから先、日本は伸びて行くと思いますけどね。

田中： ふうん。

尉川： 我々みたいな人間は、爬虫類と戦っていかなくちゃいけない。

田中： ぷ。勝算はあるんですか？（笑）

尉川： あります。あります。最終的には人間の方が爬虫類より強いっすよ。智慧があるから。

田中： まあ、そういったものを持ちながら歩くってことは、筋力ついてきますよね。

尉川： そうそう。ついてきますよお。あはは。

田中： RPGでパーティを組むとしたら、どんなキャラクターを選びますか。

尉川： RPGっていったら、まずは魔法使い、いるでしょうね。

田中： 尉川さんが、魔法使い？

尉川： 私はあ、魔法使いというよりは。どちらかというと、ダークエルフ。

田中： あははは。黒いんですか？（笑）

尉川； ははははは。うん。あるいはイリュージニスト。

田中： なにそれ。

尉川： 幻影師。幻影を見せる係（笑）

田中： あははは。やっぱり一筋縄ではいかない感じですねー（笑）

尉川： 笑 あと必要なのが、猪突猛進のナイトや剣士。後は身体を癒してくれる僧侶系。

田中： で、尉川さんの役割は

尉川： 私？ ダークエルフかイリュージニスト。ははは。

田中： それはどんな冒険になるのでしょうか。

尉川： 組織、システムを作って行くってことになるのかもしれませんがね。ひとりの勇者が全ての敵を薙ぎ払うのが、アメリカンヒーローでしょ。典型的なのはスーパーマンとか。日本は企画的システム型ですね。仮面ライダーもヒーローに見えるけど、裏でそれをバックアップするシステムが整ってますね。

田中： そうですよ。意外にね。

尉川： そうそう。宇宙戦艦ヤマトとかも、ヒーローひとりも出てこないでしょ。主人公はもちろん古代進ですけど、技術の真田、航海長の島、紅一点の森雪、波動エンジンは徳川機関長と。艦長は、沖田十三。あれ、システムですよ。

田中： システムをつくってく感じの、冒険？

尉川： そうそう。係り決めちゃってね。でも柔軟な対応しながらね。ラスボスの時には「まず、おまえが魔法を打つ」、「それで、こう」、「おまえは相手のゲージをよく見とけ」とか（笑）

田中： ってことは、冒険より、作ったシステムがどう機能して、どういう結果を出すかの方に興味がある感じ？

尉川： 冒険も楽しめますよ、そりゃ（笑） あははは。

田中： いや、比重はどっちかなって思って。

尉川： 比重はフィフティ・フィフティかな。でも、どちらかを選べっていわれたら、システム優先します。

田中： なんかそんな感じします。

尉川： ぼく、人情型なんです。いわゆるメタプログラムでいうと。あえて自分のために言っとくと。

田中： ぷっ。別に擁護しなくてもいいです（笑）

尉川： ははははは。ただし、日本人の強みはシステムだと思っているので、そっちに重点置
いちゃうかなと。

田中： 「攻め」と「守り」自分はどちらだと思えますか。

尉川： これはですね。これは、渾然一体なんですよええ。

田中： そんな感じでした。

尉川： そう。武道もやってますけど、攻めは守りにつながりますよね。渾然一体となってるん
ですが、まあ性格的に、攻める方が好きか、守る方が好きっというのと、比較的、攻める方が好き
かもしれませんね。

田中： 全く何の制約もないとしたら、何をしますか。

尉川： そうですねえ、ぼく今なんの制約もないんでね。今と同じで、物書いて自分が生活でき
るだけのお金を稼ぐ。結構しあわせですから。ただね、「来週、おれフランスで書いてくるわ」
っていうのはやりたいですね。

今はどうしても子供が小さかったりするので、朝飯を作ってやったりとか、妻は家業の和菓子工
場に行きますから。そういう制約はありますからね。そういったものがまったく無ければ、地
中海、フランス辺りの青い海を見ながら、物語書いたらはかどりそうな気がしますね。で、フラ
ンス語勉強したいですね。

田中： フランス語は、鼻に抜けんといかんのですよね。

尉川： そうらしいっすよね。がんばろ。ははは。

..... つづく ^^

田中： 笑

聞くとムカッってくる言葉ってありますか。

尉川： 結構、馬鹿って言葉は、ムカッてきますね。

田中： へえ。

尉川： なんといいですかねえ。頭ごなしの一般化代表選手のような感じがしてね。「おれが馬鹿って、なんでおまえにわかるんだ？」みたいな（笑）

田中： メタモデル的に返したくなりますよね（笑）。

※メタモデルとはコミュニケーションで発生しがちな情報伝達の方法。削除、歪曲、一般化という3つのパターンを通して情報が欠落する。

尉川： そうそうそう（笑）ムカッとくる言葉はそれくらいなんですけど、「弱い者いじめ」みると、腹が立ちますね。中学校の子達がひとりをいじめながら帰ってたりするのを見ると、大体、「おい、おまえら」と言いますね。

この間も、外国人の屈強な男たちが4～5人、自転車をとめて道塞いで話してたんです。後ろにベビーカー引いたお母さんいたんですけど、そのお母さんが怖くて通れなかったんですね。で、「邪魔だろ」と声かけて、英語ですけど、そしたら道開けました。あと、店とかで子供を感情的に怒ってるのをみると、ね。

田中： どんな時にイラッとしますか。これ今のに繋がる感じですね。

尉川： そうですね。弱い者いじめとか、立場の弱い人に、笠に着て怒鳴ってるのを見たりするのは、大嫌いですね。昔の上司にいたんですけど。

田中： いろいろあったんですね。

尉川： いろいろあったんです。こういうのは、人として、腹が立ちます。

田中： 落ち込んだ時、どうやってリセットしていますか

尉川： 落ち込んだ時は、やっぱり人と会って、話しますね。ほんとに信頼できる人のところ行って、ただ単にいろいろしゃべると。そうすると、なんか物事が整理されてきたり、あるいはそいつがアドバイスクれたりってことが多いですかね。

田中： 落ち込むことってあるんですか？

尉川： 滅多にないですよ。滅多にないですけど、まあ、たまにあります。

田中： あー、そうですね。

尉川： うん。そういう時は友達とこいって、愚痴ります。でも日常ではほとんどないっすよ。

田中： うん。そうですね。

尉川： ないですねえ。なんかあるかなあ。

田中： いいですよ、探さなくて（笑）

尉川： あははは。むしろ、「おれを落ち込ませてみろ」みたいなところありますね。

田中： なんですか？ その上から目線は？（笑）

尉川： ははは。

田中： 何をしている時が一番たのしいと感じますかっていうのは、きっと物を書いてらっしゃる時かなって思いますので。 今一番欲しいものは何ですか。

尉川： 今一番欲しいものですか。今一番欲しいものは、そうだなあ。「ぶんたい」。

田中： ん？ ぶんたい？

尉川： 自分なりの文章のスタイル、文体。

田中： あー、そっちの『ぶんたい』ね。『分隊』がうかんで来ちゃって。

尉川： ああ、そっちの分隊もなかなかおもしろいけどね。やっぱり、自分のスタイルですね。まだ、ぼく自身でいくと、ブログとか、ああいう文章は自分の文体ってあるんですけど、小説において自分の文体が確立できてないですね。

田中： やっぱり、確立って必要なんですか？

尉川： ぜえっつたい、いります！これ。なんで、まず「自分のスタイルを、どうやって切り出すか？」なんですね。軸になるものがないと、結局他のものとの区別化も出来ない。特に小説の世界は、作家なんて腐るほどいますからね、その中で自分の本を読んでもらう、好きになってもらう、ファンになってもらう。そしてそこから、次の依頼をしてもらうには、やっぱり自分なりの文体。読んだら、「あ、これ、北方謙三」とか「これは浅田次郎だな」とか、ある程度わかるでしょ。

田中： うん。

尉川： そういったところからいけば、早く確立したいなあって思いますね。

田中： へええ。そうかあ。歌とかでもそうですよね。

尉川： ですよー。

田中： 私、ソウルドアウトのディギーが大好きなんですけど、彼が歌ってる曲は、わかりますもんね。

尉川： うん。ね、他の人が歌ってても、きっとわかるじゃないですか。そうなんです、あれですよ。人によって、歌詞の文体もある。音楽のサブモダリティもあるでしょう？ドリカムとか、イントロ聞いただけで、ドリカムってわかるじゃないですか。そういうサブモダリティがあるとすると、文章にも文体があって。ぼくは今、それを模索してるんですよ。つまり今回いくつか新人賞に応募したわけですが、作品としては非常におもしろかったんだと思うんですね。掛け値なしにおもしろいと思ってた、単純に素材としてはね。

※サブモダリティ：人間が五感を通して、現実世界を認識する際に使用するさまざまな要素のこと

田中： うん。

尉川： でも、そこで落とされたというのは、自分の中に『自分らしさという文体』が確立されてないんだろうと、思うんですね。やっぱり、『らしさ』なんです。NLPなんかじゃ、「いかに自分らしさを消していくか」みたいなところってあるんだけども。

しかしながら、現実問題、この娑婆ではいかに「らしさを出していくか」ってところが大切でね。いってみれば、いろいろなトレーナーさんたちも、彼らなりの『らしさ』を出してるからこそ

、彼らしい NLP を提供できるわけですしね。

ぼくは、小説という新しい分野で、まだ確立できてないなど。嘘をつかない自分で、照らし見た時に。ブログとかでは出来てるけど、小説ではまだ確立されてないから書けない。その状態でも、なかなか受賞はしないだろうから、まずこれをやるかってことで、今やっていますね。

田中： 削ぎ落とす作業のような気がしますね。

尉川： うん。そうかもしれませんね。だから守破離の守をやってみる。

田中： そっか。難しいですね。
あなたの萌えポイントをおしえて下さい。

尉川： 萌えるところは、なんだろうな。なんかかわいらしいもの、好きですね。

田中： 意外な感じ（笑）

尉川： ぼく、大体わかるんですけど、かわいらしいもの、女性とかなんでもいいんですけど、見た瞬間、下唇のところがピクピクって震えるんですよね。

田中： うん。

尉川： それ、結構自分でも「お、なんか動いてる？」みたいな。もうひとつは援軍かな。

田中： 援軍？

尉川： 援軍。例えば、映画とかでもあるんですけど、援軍が出てくるシーンになると、大概泣くんですよね。万事休すって時に、援軍がバーンってやってくると、ぐっと引き込まれますね。

田中： あの、友情とか、弱いですか？

尉川： 友情系、弱いです。

田中： 「ロード・オブ・ザ・リング」の「フロドのために」って。書いてなかったですか？ ブログに。

尉川： その通りなんですよ。そこに何の得もないのに、友情のために駆けつけるなんてのは、

泣きが入りますね。

田中： 「義」というやつですね。

尉川： そうなんですよ。あれ、ヤバいですね。萌えポイントです。

..... つづく ^^

田中： あははは。

今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、2つ語って下さい。

尉川： ぼく、最初はやっぱり、「吉田松陰」さんの本読んだところでしょうね。あそこでやっぱり、「滅私する」というか、自分を超えていくような発想を教えられたような気がしますね。基本的に長州は嫌いなんですけど、松陰先生は、好きなんですよ。ぼく、佐幕だから（笑）

だから、自分という小さな枠を超えて、より上の、大きなもの、包括するようなもののために殉ずるという発想は松陰先生からもらったものだと思いますね。

田中： うん。

尉川： その次に、バンクーバーに行ったことも大きかったと思いますね。

田中： バンクーバー？

尉川： そこで生まれて初めて、外国に3か月とか住んでたんですね。研修で行ったんですけど。その時に、なんか、「海の向こうにもこんだけ人がいて、悲喜こもごも生活してるんだな」って思った時に、今まで日本だけに向いていた関心が、バーンって世界に向いていったというか。

そこから世界史勉強したりとか。そうすると、より日本の事がわかるようになってきた。大局的にモノゴトを観る癖をつけてもらったなあと思いますね、あの体験が。そのふたつ、かな。

田中： そのふたつとも、外に出るというか、箱の外に出る感じの体験ですよ。

尉川： あー、そうですね。ポーンと出たって感じですよ。さっき言ったゲートルの不完全性定理であるところの、システムの中ではなく、外に出る体験のような気がしますね。

田中： 大義のために自分をなくすっていうのは、自己犠牲とは違うんですよ。

尉川： うーん。おそらく自己犠牲となると、ちょっとキリスト教的発想がくっついてきちゃうんですけど、あまり、悲壮感はないというかねえ。

田中： そうですね。

尉川： 犠牲という言葉も、語源的には、人身御供に近いですからね。

田中： そう。私、自己犠牲という言葉が嫌いで。

尉川： ま、そこまでではないんだけど、自分の動きが結果として全体の利益に繋がるという
ような感じなのかな。ただし、自分が何かやらなければ、全部滅亡と。そういった時に「おまえ
、行ってくれるか？」っていうような時であれば、そうした自己犠牲も含まないこともないです
。

田中： あー、しっくりきました。なんか、経営とかでも「自分をなくせ」みたいなこというじ
ゃないですか。

尉川： うん。

田中： それを、なんかね、自己犠牲と同一化してるような気がして。

尉川： うんうんうん。なるほどね。そっか。

田中： 「違うんじゃない？」みたいな。

尉川： おそらく、その自己犠牲の場合、そういう人たちが勘違いしてるのは、そういうところ
でしょう。「自分の利益を通じて他者の利益を広げる」というのが本来の意味での、ぼくが思
うに「滅私」的のところ繋がるわけですね。こう、抽象度が上がるわけですから。

田中： うんうん。

尉川： 自分の利益が自分に直結しているだけでなく、もう一枚レイヤーを上げて、自分の利益
が他者の利益に繋がると。これがいわゆる、『私が消えてく』ことなわけですから、「滅私」で
すよね。広い意味においては、「おまえが死ねば、みんな助かる」とても含まれますけど、そ
ういう特殊な例はちょっと置いといて。

田中： 抽象度が上がるっていう事ですね。

尉川： そうそう。縦の移動ですね。

田中： しっくりきました。なんかそこら辺が結構、自己犠牲でとどまってる、そういう解釈し
てる人が多い気がして、そういうのに触れると、「けっ」みたいに思っちゃう（笑）

尉川： なるほど、なるほど。

田中： でも、稲盛さんとか、あの人たちがおっしゃってるのって、「滅私」じゃないかなって思って。

尉川： うんうん。

田中： その部分を自己犠牲の低いところでしか理解できてない人が語ると、「ちゃうやん」って、言いたくなる。

尉川： そうそうそう。結局マルクス・レーニン主義にかぶれてる人たちが言うような「滅私が悪だ」とか「滅私奉公は悪だ」とか、あるいは、国っていう発想で、国家対個人なんだとか。こういう弁証法的な対立の観念では全くない。ヘブライズム的な発想ではなく、個の一枚上のレイヤー、その上のレイヤーと重ねていくわけですからね。水平で考えるから誤解しちゃう。レイヤーを重ねて、抽象度を上げていくという縦移動の発想が大切だと思います。

だから、総理なんていうのも、国の代表ですけども、且つ、個でもあるわけです。それは重なってるでしょ。だからこそ、滅私奉公しないとダメなんですよ、ああいう人は。でも滅私奉公が自己実現に繋がっていたりする場合がありますからね。

だから、自分を殺してまでやらなくちゃいけないという発想の根底にあるところで、その自分の頑張りがみんなのしあわせに繋がっている。おまえが不幸になったら、みんな幸せだという、そういうものではない。すべてではない。ノット・イコールではない。

田中： そうですね。そこで、そういう人の話を聞くと、私がもやもやするんですね。

尉川： 大体そういう時って、みなさん2次元で考えるんですよ。横軸で考えるでしょ。だから対立軸が生れてしまうんですね。3次元の縦軸で考えると結構理解しやすいですよ。

田中： そうですね。

尉川： 包括的に。全部縦に繋がってる。より上の次元は下の概念を包括していくわけですから。

田中： そうですね。

今の自分を突き動かしているものは、何だと思いますか。

尉川： うん、そうね、やっぱり今は作家として、名を上げたいと思ってますから、そういう思

いかな。それまでは起業してそこそこの成功をおさめたいと思ってまして、まあまあそれはそこそこ達成しましたが、次の人生、また新しく目標を設定したわけですね。小説作家として、しっかりと名を上げて行きたいなって。

田中： 情熱ですね。

尉川： そうですね。その先に何があるかといえば、自分が死んでも読み継がれる作品を1冊でも書ければいい。ぼくの場合は歴史エンターテインメントを考えてますね。歴史ですから元々古いトリックとかも使わないので、歴史エンタメでいい物書いていきたいなって。

田中： そこに尉川さんの解釈とかが入って、おもしろいものになりそうですね。

尉川： そうですね。そうになると嬉しいですね。

田中： 今死んでも悔いはありませんか

尉川： いやー、悔いますね。いろんな人の読んでも、悔いなんて言ってらっしゃる方もいて、素晴らしいなって思いますけど。また新しい目標設定しちゃったんでね。まだ死んでから残るもの、書ききれてないんで。まだまだ（笑）

田中： 先日インタビューさせていただいた方なんですけど、この質問したら、即座に「あるよ！」って（笑）「だから毎日納豆食べてるんだよ」って言われました。

尉川： ははは。いや、ぼくの場合もまったくそうだと思いますよ。枇杷の種をすりつぶしたのを毎日吞んでます。健康にいらしくって。

田中： へー。またレアなものを。

尉川： 枇杷の葉とか、凄く体にいらしいですよ。

田中： 枇杷の葉は聞いたことがあります。

尉川： なんかそれを妻がもってきたんです、実家から。これが、くそまずいんですよ。漢方ですからね。でも我慢して毎日飲んでます。

田中： じゃあ、それも習慣じゃないですか。

尉川：　そうですね、習慣ですね。そのくせ結構煙草は吸いますけどね。ぼく、酒はそんなに飲まないでしょ。ギャンブルしないでしょ。まじめなんですよ、基本的に。だからひとつくらい人間らしいとこ、とっといてもいいかなって。煙草好きだし。

田中：　ふふふ。

身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一か月だとしたら、何をしますか。

尉川：　そしたらね、塾を作りますね。

田中：　塾？

尉川：　うん。巨大な塾。カーネギーホールみたいな巨大な建物の塾。そして誰でもそこに来て学べる塾、作りたいですね。講師はいろんな人がいるんですけど、まあ共産主義的なところは排除してね。普通学校で教えないようなことを教えてくれる、そんな興味のある事が、その塾で学べるんですよ。

田中：　学校じゃないんですね。

尉川：　学校となると、「先生」と「生徒」みたいになるじゃないですか。なので、塾だったら自由に入って来れる。そんな感じなの、作りたいですね。ローマ風の建築で。そこにはちゃんとテルマエもありで。老人ホームとかも併設して、保育園も、じいさんも若い衆もみんな一緒になってごちゃごちゃそこにいると。

田中：　そこでなにを伝えたい感じですか？

尉川：　あー、もう何でもいい感じですけどね。ただ今よりも、ものを自分の頭で考えることが出来る人材ですかね。だからマスコミでは教えない、インターネットでは知りえない情報、例えば国際政治、あるいは昔の古文書読みたいとか、ラテン語だったりとか、いろいろなものを自由に学べるところ。小学生から社会人まで好きな時に来られるような巨大な自習室とか。でもそこは勉強する所だから、わいわい遊んでいたらつまみ出される。ぼくがマイクロソフトのビル・ゲイツだったら、これやりますね。

田中：　やってくださいよ。

尉川：　はははは。

..... つづく ^^

田中： 世界に向けて演説をしたら、何を一番伝えたいですか。

尉川： そうだねえ。人間回帰してみるっていうのもいいかもしれないですね。お金も大事ですけど、人間らしさもなくなってるようなところもある気がしてね、人間の役割はなんだろうなって思うと、この智慧を使っていかに地球と共生していくかでしょうから。人間性の回帰、みたいなものがあればおもしろいかなって思いますね。

田中： 人間回帰ですね。

尉川： 人間回帰。ルネサンスはまさにそうですね。元々ギリシャ、ローマの頃の方が美術にしても非常に優れていたでしょ。それがキリスト教の影響で、人間性がなくなっていったわけです。平面っぽい絵しか描けなくなっていった。美術が廃れてね。で、あるフィレンツェの彫刻家が、発掘された石像を見たわけです。それみてショック受けるわけです。「あら、なにこれ！昔の方がすげーじゃん」って。それで彼らはルネサンスを起こしてくんですね。

田中： うん。

尉川： そして今は「金金金」金が全てですね。まあ、ヨーロッパの方ではギリ残ってますけどね。「お金をどんだけ積んでも、いやなやつには売らない」というのが、ありますよね。例えば高級ブランドのショップとか。日本の若い子たちが行ってもね、ほんとにいいものは出さなかったりしますね。

田中： そうか。お客さん見て、商品出すんですね。

尉川： そう。お客さん見て。だから店員が気に入らなかったり、「ちょっと違うんじゃない？」っていうと、売らない。

田中： そこにもプライドというか、気概というか。店員さんの、自分の人を見る目っていうものに自信を持ってるみたいな。

尉川： そうですね。こういったところとか、人間に繋がって行きますよね。人を見る、人間としての総合力。判断されるっていうと語弊があるかもしれないですけど、そこで見られるってことであれば、人は人格を磨こうとしますしね。より人間らしさを追求して、しっかりと生きて行こうとしますしね。

今はお金が中心の資本主義全盛ですから、人格なんかどうでもいいでしょ。金さえあれば何でもできるわけですよ。「それでほんとにいいのか？」っていうと、おもしろくないですね。

個人的にね。これは賛否両論あって極論でしょうけど、ぼくは昔のように財閥とか、士族、華族とか。こういう人たちがいたことで、日本というのは奥深い文化があったのだと思いますね。メリットの側面もあったと思います。

つまり庶民でいくら金持ってたって、絶対に届かないものがあったんです。貧乏でも華族や士族が、そういう文化を担ってたりする部分ってあったりするでしょ。だから、そういうところはより深い、社会に深みが出るんじゃないかなって思いますね。かといって偏るのはよくない。一番いいのってなにかなーって。

人間が人格、あるいは人間性とか、その辺りで人の価値が決まる。人の価値はないんでしょうけど、あえていうならば、金を持ってるか持っていないで、人間の格が決まってしまう世の中ではなく、段階的には人間性を磨いた人たちで、そういったものが決まってる方が、おもしろいかな。ゆくゆくはそういったものも、全くなくなるんでしょうけどね。

田中： そうですね。そういったものすら超越したものになるといいですね。

尉川： ゆくゆくはね。ただ物事、段階的にやってかなくちゃいけない。一足飛びには、そこには行けないでしょうから。

田中： そうですね。

尉川： そんなところかな、演説したいことは。

田中： 生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか。

尉川： あー、どっちもいいですけど、今度女でもおもしろいかもしれませんね。

田中： 人間以外のものに生まれ変われるとしたら、なにがいいですか。

尉川： うーん。そうっすねえ。人間以外のものだとするとお、渡り鳥とかいいでしょうね。

田中： ふふふ。渡り鳥？ カラスじゃないの？

尉川： カラスもいい。ま、自由気まま、且つ国境なく抜けてくところなんか、かっこいいっすね。いや、別に国境は大事ですよ。大事なんだけど。

田中： 確かに国境があるから、国境を超えることで得られるものって、ありますよね。

尉川： うん、あるある。

田中： 制約があるが故に、感じることでできる自由さとか。

尉川： そうそうそう。そういうの、ありますからね。

田中： 世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか。

尉川： これは、もう「蚊」ですね。

田中： あははは。「蚊」？ あの血を吸う「蚊」？

尉川： あれはほんとムカつきますね。

田中： え？ マジで言ってる？（笑）

尉川： ははは。うん、結構マジ（笑）人によっては、殺人とか、犯罪とか。これは、要は人の見方によって変わってくるところもあるわけでしょう。犯罪も、なにをもって犯罪とするか。刑法によって変わってくる。だから現在の犯罪と、王政時代の犯罪と違うだろうし。そうすると、非常に難しいですね、判断がね。判断が難しいものを選ぶよりは、明らかに、役に立ってないと思われる「蚊」を（笑）

田中： あはははは。

尉川： ははははは。

田中： 私これ質問する時に、「ないって言われるかな」って思いながら聞いたんですよ。

尉川： ああ。なるほど。うんうん。

田中： 今おっしゃったみたいに、「なにをもって犯罪とするのか」みたいなものって多いじゃないですか。

尉川： 多い、多い。

田中： だから、「ない」っていうかなって（笑）

尉川： はははは。「蚊」ですね（笑）

田中： 「蚊」は役に立ってないですか？

尉川： うん。少なくともぼくの知る範囲では。

田中： 自分の性格を象徴するようなエピソードがあったら、教えてください。

尉川： うーん。エピソードはないですけども。そうね、最近は子供が好きですね。

田中： 子供が好き？

尉川： うん。昔そんなに好きじゃなかったんですよ。最近子育てしたせいもあってか、小学校の子供たちとか元気で校庭で遊んでるのを見ると、自然にこっちもにこにこしてくるっていうか（笑）

田中： ふふふ。なんか、とてもいい人みたいじゃないですか（笑）

尉川： そう（笑）子供はいいですね。だから子供を殺すような奴はゆるせないね。

田中： それは犯罪なんですね？

尉川： うん。それは犯罪。戦争も、もちろんない方がいいけど兵隊と兵隊が戦うところに関しては、基本、武士のDNAなんで、仕方ないかなって思いますけど、戦争になったらね。でも、子供はあ、だめですね。子供殺しちゃダメだと。最近つくづく思う。シリアの爆撃とかで、子供が死んでるのとか。

田中： 基本、弱い、自分の身を自分で守れないものは、攻撃しちゃいかんと、思いますね。

尉川： うん。そうそうそう。逆に言うと少年兵とかも、ダメだってことですよ。年端もいかない子に銃持たせるのは。まあ、私も思いのほか、子供好きだったんだなってことを最近、感じましたね。

田中： ははは。最近になって気づいたんですか？（笑）

尉川： そう、最近なって気づいた。

田中： 気づいたっていうか、なんか育ったのかも、しんない。

尉川： かもしんないですね。

田中： 自分のキャラを一言でいうなら。

尉川： 一言でいうなら、「豹（ひょう）」。虎ほど強くない。豹って結構しなやかでしょ？

田中： うん。

尉川： でやっぱり結構木の上とかで昼寝したたり。でも狙う時は、ギャツといく。そういった面で言うと、ライオンほど俺様大事じゃないし、みたいな。草食動物じゃない気がするんですよ。だから「豹」かな。

田中： そうですね。必要なとき以外は出張らない感じが。

尉川： そうね。

田中： 今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか。

尉川： やっぱ、家族ですかね。家族大切ですね。うん。犬も含めてね。

田中： 今日のこの時間で、何か気付いたことはあったら教えてください。

尉川： そうですね。いつも仕掛け人として見ていたわけですが、やっぱり、質問して答えるっていうのは、頭をよく使うなって。

田中： あはは。

尉川： ってことは、なんか奥底から出てる、特にこの長時間の間にね。

田中： 長くなっちゃって、すみません。

尉川： ううん。だからこそ、無意識的にいろんなものが出てくるんでしょうね。そうかなって思いました。非常にいい気づき、学びがあったなと思いますね。

田中： おもしろかった。やっぱり尉川さん、きっと内省とか、いろんな視点でみてらっしゃる方なんで、このインタビューの質問とかさせていただいた時に、すごいスムーズだなって。

尉川： あ、なるほど、なるほど。うんうんうん。

田中： 焦点を当てていらっしゃらないと、結構答えるのにむづかしい場合もあるみたいで。

尉川： そういうものなのかもしれませんね。

田中： 経営者の方たちっていうのは、一点だけ。さっき尉川さんもおっしゃってたけど、横軸でしか、見ていらっしゃらないことも多いんだろうなって、感じたりしました。

尉川： 縦軸要素ですよ。ぼくは、個人的には韓国好きじゃないですけど、それも縦軸で考えていくと、いいと思うんですね。お互いの国がやらないとだめですよ。身の回りや、価値観を共有してる連中とかだと、縦軸移動しやすいですね。まあ、いい勉強になりました、今日は。

田中： いえー、おもしろかったです。長時間お付き合いいただきまして、ほんとにありがとうございます。

尉川： いいえ、いいえ。こちらこそ！

最後までお読みいただきましてありがとうございました。

今回、あなたの心の内側では、どのような気づきがありましたか。

少しでもみなさまのお役に立てましたら幸いです。

さて、私にはこのインタビュー記事の電子書籍出版のほかに、

『コーチング』 という専門職の顔も持っています。

実は、今お読みになられたインタビューそのものも、このコーチングの考え方に則って行っています。

コーチングとは、人材開発のための手法のひとつで、

おもに対話によって相手の自己実現や目標達成を図る体系的な技術のことです。

相手の話を聴き、感じたことを伝えて承認し、相手に適切な質問をすることで、

クライアントの自発的な行動を促していくことができます。

日本にはいくつかのコーチングスクールがあります。私はCTIというコーチングスクール

でCPC（Certified Professional Co-Active Coach）という国際資格を取得しています。現在、日本では約550人のコーチがCPCの資格を取得し、世界中では6,900人のコーチがこの資格を持って活躍しています。（2014年6月現在）

また、『人間の脳の取り扱い説明書』とも称される実践心理学 『NLP（神経言語プログラム）』 も学び、

米国NLP協会認定トレーナーアソシエイトの国際資格も取得しています。

このNLPとコーチングはとても親和性が高く、相互に相乗効果を発揮して、

クライアント様の変化変容、目標実現に大きく寄与していると評価を頂戴しています。

その他、ソースワークショップトレーナーの資格も取得しており、クライアント様に

「本当に生き甲斐のある人生とは何か」 を見定めていただくためのサポートもさせていただいております。

しばらく新規クライアント様の募集は諸事情によりおやすみをさせていただいておりましたが、このたび、また新規クライアント様の募集を再開させていただくことになりました。

もし、少しでもご興味やご関心がおありでしたら、無料体験コーチングを受講なさってみませんか。

今なら1回60分のコーチングセッションを無料でお受けしております。

これまでも、たくさんの経営者様、事業家様、サラリーマンの方、もちろん主婦の方々までコーチングをさせていただきました。柔軟なアプローチと揺るぎない信頼関係。これが私のコーチングのスタイルです。

あなたの目標達成はもちろん、日常生活でのメンタル調整に、思考や判断の整理に、コーチングやNLPは素晴らしい効果を発揮します。私にあなたのサポートをさせていただけるのであれば、これに優る喜びはありません。あなたからのお問い合わせを心からお待ちしています。

無料コーチングセッション、その他のお問い合わせはお気軽にこちらから。

< ace-support@samba.ocn.ne.jp >

最後までお読みいただきましてまことにありがとうございました。

ハタラクヒトペディア電子出版

記者兼編集長 田中永子

ハタラクヒト*ペディア 10 < 尉川太尊 氏 > なんとなく特別編

<http://p.booklog.jp/book/80402>

著者：田中永子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/24riko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80402>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80402>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ